

# 小田原史談

第 166 号

発行所 小田原史談会  
小田原市栄町 2-13-20  
アオキ画廊内 電話(24) 0637

## 耕牧舎と須永伝蔵

辻内 和七郎

一 はじめに

四つのゴルフ場・箱根湿生花園・多くの旅館・ホテル・寮・保養所・別荘のある仙石原高原に、明治時代大きな牧場があったことは、あまり知られていない。牧場の名前は耕牧舎、責任者は須永伝蔵、その開拓の苦勞と今日に至る経緯について記してみることにする。

二 耕牧舎の発足

明治・大正期の偉大な指導者の一人 渋沢栄一が、銀行・製紙・紡績・化学工業・鉄道・瓦斯・教育そして社会福祉事業に優秀な種を蒔き、守り育てたことは多くの人々の知るところである。

その事業の中に開墾があり、その一つがここという耕牧舎である。

明治十二年(一八七九)、渋沢栄一は、

我が国においても毛布製造

### 須永伝蔵の略歴

天保十三年(一八四二)十二月、群馬県新田郡成塚村に生まれ、渋沢栄一の推薦により一橋家に仕え、主君慶喜が第十五代將軍を継ぐにあたり幕臣となった。

戊辰の変では彰義隊に加わり、幹部として謹慎中の主君を守護した。帰郷して農業に従事していたが、明治十三年(一八八〇)耕牧舎支配人となり、さらに同三十五年には仙石原の村長に推された。明治三十七年(一九〇六)八月十三日没、享年六十三歳。

の原料である羊毛の必要を感じて渋沢喜作・益田孝(初代三井物産社長)・小松彰(株式取引所頭取)と相謀り、内務省勸農局に対し「メリノール種」羊五〇〇頭の借用を願い出て許可される。と直ちに、従弟須永伝蔵を実習のため下総三里塚牧羊場に派遣し、併せて牧場の選定を指示した。

実習のかたわら、牧羊場の米国人技師が各地を視察作成した報告書から、相模国足柄下郡仙石原と下野国塩名郡伊佐野原を候補地とした。

一方、『自叙益田孝翁伝』には次のように記されている。

矢野二郎が病気で箱根宮ノ下の奈良屋へ来ていて、或日一緒にその辺をぶらぶら歩いていた。川の向うにベルツ博士が日本一だと云うた温泉がある。そこへ行こうかと云うたのだが、道が面倒なので其れはやめて碓氷峠をぶらぶら歩いて行くと、ひょっと村に出た。非常に腹がへって居る。百姓家の縁に腰をかけて、

婆さんに何か食うものはあるまいかと云うと、麦飯ならあると云う。——中略——婆さんの云うのは、この少し先に大きな原がある。何もしないで遊ばせると云う。耳よりの話だ。とだんだん聞いて見ると、面白そうである。教えられた通りに行ってみると成程立派な原である。ここで牧畜をやったら豪気なものだ。之は天の賜だと思つて参考のためにその土や草などを取つて東京へ持つて帰った。——中略——

渋沢さんに仙石原の話をして、牧場をやるうらじゃ御座らんかと云うと、大賛成で早速やることになった。——後略——

渋沢栄一等も自ら現地を調査した結果仙石原を適地と決定した。早速神奈川県に出願し、七三七町三反一畝五歩の払下げを受け、明治十三年二月 須永伝蔵を現地責任者として開拓に着手した。

この土地は村の共有秣場を県が牧畜試験場として買収してあったものである。

### 三 開拓の苦勞

渋沢の命を受けて仙石原に着任した須永伝蔵は開拓に努力したが、牧場には一面大きな茅が繁茂して到底牧羊場とすることが出来ず、己むを得ず計画を変更、牛馬を放牧して草質を改良することとし、洋牛の牝の



れた。

第一審・第二審で須永等は無罪となったものの大審院では敗訴禁固刑を受けたのである。

これが芦の湖の水利権を静岡県側に帰せしめたといわれる逆川事件である。

しかしこの判決は、甲羅伏を破壊した行為についてのものであり、水利権についての判断を示したものでないとする郷土史家稲村得寿がその著作『芦の湖分水史考』で詳しい資料を駆使して反論している。

明治三十二年(一八九) 出獄した須永伝蔵は、明治三十四年再び村会議員(第一回は明治二十四年から二十八年)となり、さらに翌年勝俣沢次郎を継いで第二代目の仙石原村長に就任したのである。

六 須永伝蔵の死と営業の廃止

明治十三年二月耕牧舎の責任者に就任して以来、仙石原を埋骨の地と定め、開拓に専心努力する一方、仙石原村の村会議員さらには村長をも勤め村の開発にも尽力した須永伝蔵は、胃癌の冒す処となり、明治三十七年八月十三日死去、享年六十三歳であった。

この波乱に満ちた生涯については前出の『箱根分水史考』に詳しい。

突然その中心を失った耕牧舎は代るべき適任者もなかったため事業の廃止を決定、清算人として渋沢栄一の秘書八十島親徳が任命された。

その後、渋沢栄一は益田孝とともに

陸軍大臣に試験場としての利用を申し入れたが実現せず、結局、従来の牛乳販売店はそれぞれの経営者に無利息、七ヶ年賦を以て売却、さらに、所有地の半分・仙石ゴルフコース・箱根温生花園から大箱根カントリークラブに至る三五〇町歩を仙石原村に寄付・残地については、旧牧場の萱を馬糧として陸軍に売却・農地・植林は続けるなどして維持をしていた。

この土地が、再び脚光を浴びるようになったのは昭和に入ってからである。

七 須永伝蔵の碑

昭和三年(一九二八)七月耕牧舎の全資産を引継ぎ仙石原地所株式会社が発足・まず牧場跡地約十萬坪を「仙石原温泉荘」と命名 温泉付分譲地として販売することに決定。更に昭和五年九月には大涌谷の熱源をより高度に使用し奥箱根一帯に温泉を供給することを目的に、箱根温泉供給株式会社設立された。

昭和六年、須永伝蔵の功績を記念し長くその偉業を後世に伝えるべく時の仙石原村長石村喜作が総代となり、村の有志をして仙石原地所株式会社の手により碑面題字は渋沢栄一・

碑文は穂積歌子による「須永君碑」が耕牧舎本社跡に建てられた。

その後、箱根カントリークラブが開業、この碑は一三番ホール横に位

「碑文」

天下の險の箱根乃山も、今は都人遊歩の地なり、山上の高原の町とならんも怪しむに足らねど、繁れる草むら切り払ひて、その基を開きし人こそ尊けれ、この仙石原は明治十三年渋沢子爵、益田男爵等相謀りて、牧畜の業を開かんとせし時、須永伝蔵君専ら事に任じて選び定めたる牧場の地なり、其年君は耕牧舎を設けてこを永住の処と定め、牛馬の飼育と、牛乳牛酪の販売とに力を尽くすこと二十五年、その功漸くあらはれて良き馬をも出しけるが、殊に乳牛飼育の業はいよいよ榮えて箱根七湯は更なり、東京、小田原、沼津、さては甲州の各地にまで牛乳販売所を出すに至れり、その事業の規模こそ小なれ、その頃既に早く牛乳牛酪の衛生に必要なことを世人に知らしめたる功は大なりといひつべし、ただ惜しむらくは此地年と与に牧草乏しくなれるが上に、明治三十七年の夏、君が此地に永眠せられて後其人無くして其事廢れ、君が心尽しの牧場もまた元の原野にかへり、萱草徒らに生ひ、空しく枯れつつ二十六年の春秋を過ぎけるが、昭和四年乃秋に至り芦の湖に近き土地の一部、宮内省御用地としてめされけるにより仙石原は再び眠り覚め、由縁の人々会社を結びて此地を経営し、このたびは別荘街として、安息養生の境たらしめんとす。そも須永君は渋沢子爵の従弟にて、幕末の頃憂國の志を同じくして、共に郷関を出でたる人なり。其後の境遇其人に酬ゆるに足らざりしかど、天命に安んじ、人知らずして慍(いかに)らずに誠(まこと)に高士の風ありけり。渋沢子爵・益田男爵常にその長逝を悼まれけるが、此地の再び榮えんとするに当りて、懐旧の情に堪へざるものあり、仙石原村の人々も須永君がその昔、同村村会議員となり、又村長をもつとめ、且此処の水利に關して其身をも顧みず、いたく力を尽されたりし功勞を偲び、感激浅からず、君の旧跡に記念の碑を建て、仙石原開発の君の初志が、形こそ異なれ、ここに成就することを現はにせんとす。あはれ君が在天の靈、さぞなうれしみて、此地の繁榮と、此処に來り住まん人々の健康とを、長尾峠の坂路行末長く、冠が嶽のむら松幾千代かけてぞ守護なし給ふらむ

昭和六年七月

渋沢子爵に代りて穂積歌子しるす

置することになったが 箱根温泉供

給株式会社創立六〇周年に当り 平

成三年六月現在地に移設され 発展

した仙石原の様子を静かに見守って

に記述しました。 ○本文は『箱根温泉社史』を参考

## 小田原叢談 (五)

## 石井富之助

## 文庫流れ

小田原における近代図書館運動の発祥は意外に古く、しかも市民の思いも及ばぬ人によって、その第一ペー

ジがめくられている。明治時代の小田原を知る上において、片岡永左衛門氏の『明治小田原町誌』と並ぶ貴重な資料として『函東会報告誌』という雑誌がある。明治二十二年(一八八

十月)に創刊号を出している。その第五号(明治二十三年二月発行)の雑報欄につき

伯は喜んで所蔵の書物を貸し与えてくれるであろう。伯は喜んで所蔵の書物を貸し与えてくれるであろう。伯は喜んで所蔵の書物を貸し与えてくれるであろう。

一月五日の事であった。足柄下郡警察署長布野万長氏は伊藤伯(博文)の意を受けて、小田原新年会の席上で演説された。そのあらましは、伊藤伯が当地に住んでおられるからは、何でも当地の利益になることなら

してやろうという考えを持たれている。そして、伯は多数の書物を所蔵しているの、これを広く町民に読ませるようにならうかと考えられている。故に有志者があって、一軒の家を借りるか、あるいはほかに適當の場所を作って、管理を十分やるというのであれば、伯は喜んで所蔵の書物を貸し与えてくれるであろう。伯は喜んで所蔵の書物を貸し与えてくれるであろう。

校でこれを管理し、同時に小田原町民で古文書を持っている人も、むだにこれをたばねて蔵にしまっておき鼠のすみかとする

ことなく、また箱の中に蔵して紙魚のえさにすることなく、この文庫に提供して衆人の利益を考えられるならば、その公益は図り知れぬものがある。伯の好意に感謝し、有志家の奮発を祈る。

伊藤博文は明治二十二年(一八八〇)枢密院議長を辞し、御幸の浜に滄浪閣を建て、しばらく閑日月を送っていた。この博文によって投げられた一石は当然波紋をお

こさずにはいかなかった。小田原を中心として足柄下郡の教育振興を志すもの百三十二名をもって組織された函左教育会は、二月九日幸女学校で開催された第五回総会でこの問題をとりあげ、「小田原町の内に書籍館様のものを創めること及びその方法の議題は満場の賛成でこれを創立することに決し、その方法手続等は幹事がこれを取り調べること」を議決し、幹事の改選を行った結果、上原関次郎、戸沢政恒、笠原尚衛、志摩勝富、牧田源之丞の五氏が再選された。こうして、小田原の最初の図書館は「小田原文庫」と名付け



カット 内田 美枝子

られ設立準備が進められたのであった。ここで当時日本の図書館はどんなありさまであったか一顧してみよう。

明治時代に入って、学校教育は政府の積極的な施策によっていちじるしい発達をとげたが、図書館事業などにはなかなか手がまわらず、わずかに明治五年(一八七三)に官立図書館東京書籍館(後の上野の図書館)が設立されただけであった。明治二十二年に至りようやく図書館令が發布されたものの、きわめて微温的、消極的なものであった。したがって、府県立では明治三十一年(一八九〇)に京都府立、同三十六年(一九〇三)に大阪府立が建てられ、市立では明治三十九年に東京市立図書館がやっと市民にお目見えしたのであった。

このような状況の時、しかも府県立最初の京都に先きだつこと八年の明治二十三年(一八九〇)に、伊藤博文のお声がかかりにせよ、小田原に図書館建設の準備が進められたことは、まことに驚異に値することなのであった。

ところが、『函東会報告



平成6年1月松の内の撮影

誌」第十三号(明治二十三年十一月発行)で雑報子は

小田原文庫 文庫名はずでにあって、形はついに消えた。好意を表せられた伊藤伯は、いくたの蔵書を深く蔵して、また出

そうとしない。かつて「草子洗」という語があったと聞くが、まだ「文庫流」という語のあることを聞かない。ああ。

と嘆じている。二月に設立を決議してか

## 石井富之助さんの ご逝去を悼む

高田 喜久三

さる四月十七日ご逝去された石井富之助さんは、私より五歳先輩の八十九歳であつた。私は折りにふれ石井さんにはいろいろと懇切なご教示を頂いた。昭和六

十年私が『北村透谷物語』を上梓した時には序文をお願いして一篇を飾って頂いた。印刷出来た一部を持参して荻窪のお住居を初めてお訪ねした折には、庭隅

ら十か月ばかりの間に、どういう経過をたどったかわからないが、小田原最初の図書館はついに流産し、伊藤博文は初代貴族院議長となり、十一月に小田原を去った。

今、小田原市立図書館に

の白の侘助の大樹が花盛りであつたことを、私は今でも印象深い思い出として胸に秘めている。

小田原の事ならどんなことでも石井さんに訊けば判ると、私はその後も屢々佐助居をお訪ねして、たくさんのご教示を頂いた。だが

### 石井富之助さんと北条時頼の書

五年前の平成三年の春先荻窪に石井富之助さんをお訪ねしたときの事であつた。

「……北条時頼の書を仕舞って置いたが、こんど、表装したんで掲げたいよ」と、石井さんは、床の間を指して言われるではないか……。

しかし、時頼のものにしては、紙がいやに白っぽく新しいので、すぐさま複製と分かるのだが……。

しかし以来、石井さんは、

山県有朋の文庫がある。この時伊藤博文の本を買っておけば明治の二大元勲の蔵書を併せ持つことになったのである。それを考えると、かえすがえすも残念な気がする。

(続)

今ははや、あの温顔もアケスケな小田原弁も再びうかがうことは出来ない。石井さんは正に小田原の生字引であつた。そして城下町小田原の明治大正昭和の容姿を隈なく書き遺して下さつた。有難いことである。

この軸を毎年春先になると掲げ、その雰囲気浸っておられた。

ところが、時頼の書なるものは単なる複製品ではなかった。言われて、初めて知つたのだが、拓本が、その元となつていた。文字の部分鉛筆で縁どり、墨でなぞらえ、陰面を陽面に写し換えたものだと言う。穂先が割れた細部まで念を入れていた。

勿論、石井さんの手によ

るものだが、拓本は、鈴木十郎氏が求めたものであつたという。

「どうだい、時頼のものを手に入れたが……」と、鈴木市長から示された石井図書館長は、ちよつと息を呑み「……これは素晴らしきもので……」といった情景を勝手に想像するのだが、ともかく、市長と図書館長の職務上のことを超えた間柄であつたのではないかと思われる。

こんな伝説がある。鈴木市長が機嫌が悪く、側近が、その対応にハラハラしているときに、石井館長が姿を見せると、市長は立ち所にご機嫌を直したという。もし、そうだとすると、石井さんの人徳というより他はない。

ともあれ、いくら魅入つたものとはいへ、時頼の詩文を再現しようという着想は浮かんでこない。私は内心舌を巻いた。その創意は、石井さん独自の感覚そのものと言えよう。

その書からは、細心というか、丹念というか、几帳面というか、そんな人柄が滲み出ている。

同じことは、葬儀の折、

参列者に配られた般若心経についてとも言える。

一字一画を忽せにせず、最後まで同じ調子で書かれている。参列者は、手にした瞬間、コピーしたものと書いた人が多かったようだ。だが、そうではない。

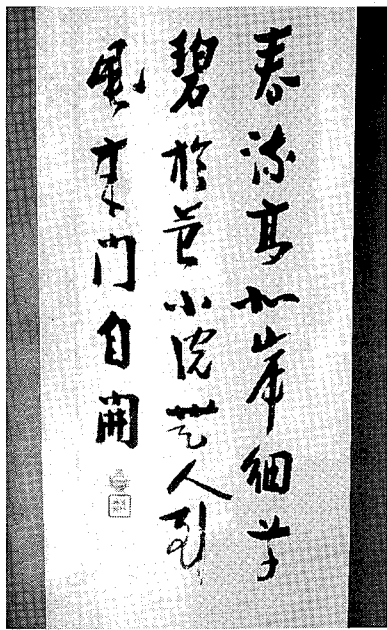
「一日一枚、千枚が目標だよ」と、初めて聞いたのは、平成元年の早春だったと思う。それは六百枚を越えていた。日課の写経は、九時過ぎに始め、一時間三十分ぐらいかけて出来上がったという。

亡くなられたあと、時頼の軸を撮るため、石井さん宅を訪れたとき、念のため写経のことを家人に尋ねると、その手控えが残されていた。ここにも、石井さんの几帳面さを見る思いだった。写経の始めは昭和六十

三年五月二十日、終りは平成三年三月三十日で、一、〇一五枚に達していた。その上、途中に渡した人の名と月日をも記す丹念さであった。

几帳面さは、石井さんの原稿にもうかがえる。

「おれの原稿、『小田原史談』に載せて貰うのが一番いいよ」と言って、『小田原叢談』の原稿を渡されたのは、平成二年の春先のことだったと思う。かなりの量である。書き溜められていたもので、最初から最後まで首尾一貫した端正な鉛筆書きの文字が、原稿用紙の枠の中に、きちんと収まっている。訂正や付け足しも、それに誤字・脱字も全くないので、オペレーターの作業が非常にやり易いと思われる。根気の良さを示すも



のでもある。

「俺は歴史家ぢやねえ」と、時に口にした石井さんは、術学的なところがなく、誰にも読み易い、分かり易い文章で書かれているのは、皆さん、先刻ご承知の事だ。

「俺の生きてる間、『小田原史談』には、とても載せきれねえなア」と、言われたのは昨年春のこと。その通りになってしまった。まだ、数年分はある。

話を元に戻す。

時頼の書を読み下しかねていると、次のように読むのだと半紙に書いてくれた。

春流高<sup>北</sup>岸<sup>二</sup>細草<sup>一</sup>

小院<sup>ナリ</sup>無人<sup>ク</sup>致<sup>レ</sup>

風来<sup>ラ</sup>門自<sup>ラ</sup>開<sup>ク</sup>

だが、芭の字を判りかねていると、

「実は、わしにも分からねえ。キと読むらしいが、辞引にも出ていねえで……」

それでも気分(早春の)を味あわせてくれるもんだし」と、石井さんの答は率直であった。

それに、書体が豪気で、いかにも時頼らしい雰囲気。が漂っていて好ましいので毎年掲げると言われた。果して、時頼の書なのかどうなのか?

### 土佐入道の塚

本光寺墓地(小田原市東町三三三)の地続きに、土佐守入道の墓と伝えられる塚がある(写真)。地域の人には、あまり知られていない存在である。川田泰司氏(小田原市寿町四一七一〇)の話によると、あたりは俗に、土佐数と呼ばれていて、以前、山王原(東町)の子供が、笹竹を切りに来て、竹の切口が腹に刺さってしまった祟りのある所とされているという。

周辺が宅地化されているのに、そこは開発されずに残っている。祟りのある場所としての伝承があるからかもしれない。

土佐守入道が討死にした五月二十八日には、毎年、本光寺(寿町五二一三三四)の住職が経をあげ供養するという。ところが、土佐守入道と

その事を石井さんに尋ねるのは、野暮というものだろう。石井さんの風流の趣は、その真贋を超えたところにあった。

(岡部 忠夫)



いう人物は、全く分かっていない。

この辺は、豊臣秀吉が小田原攻めの際、徳川家康軍が陣した地域である。守備の北条方と小競り合のあったのは、六月二十二日、小田原城外郭の篠曲輪(浜町山王神社付近)で、土佐守入道守が討死にした日も場所も異なる。それに、もし、家康の武将ならば、墓碑が建てられていると思われるが……。

土佐守入道は果たして実在した人物なのだろうか?

## お茶の話

## 三谷喜久満

## お茶栽培の始まり

小学校五年生、昭和四年の頃の思い出である。

大正年代の末に、国から提唱された村の自力更止が、私の住んでいた足柄上郡清水村(山北町)でも漸く軌道に乗って来た。養蚕・養鶏・養豚・製茶と順調に進

展して来たのである。私は鉄道員の子供で、村のことは小学校において子供同志の間で客観的にしか見ていないから、詳しくは判らない。

何故か私は、その頃村の産業に興味を持っていた。清水小学校の前にある清水会館は、繭の集荷場になっていて、春蚕・夏蚕・秋蚕と繭の出荷が行なわれる。養鶏による鶏卵の集荷も、この会館で月に何回か行な

れた。そのような集荷・出荷が行われる時は、村には活気が漲り、人々の顔には何か明るい輝きと安らぎが感じられた。

## 一方、茶業に関しては、

大正十四年から十五年頃からであろう、村の各部落の人家に近い雑木林を開墾したり、農耕に困難な耕作地を茶畑に転換して、お茶の種付けをしたのが成長して漸くお茶摘みが出来るようになった。

村ではその時期に合わせて小学校の校門前に農業会の製茶工場を完成し、運転を開始し製茶の仕事を始めたのである。今思えば、清水村の夜明けのような気がする。村人が一致団結して、目を輝かして目的に向かって邁進し、人々の動きに活気があった。

## 足柄茶創成の功労者

## 細谷麟平さん

さて、この清水村の製茶を手掛けて足柄茶として国内に名を知らしめた方は、今は亡き細谷麟平さんである。その活躍は実に涙ぐましいもので心血を注ぐとはこのようなことであろう。

細谷麟平さんは、峯部落の篤農家で村役場では当時助役さんであった。また農業会役員で、製茶工場の最高責任者として工場の建設から運転までまさに寝食を忘れて茶業に没頭されていた。

麟平さんには辰雄さんと言う学校の成績の素晴らしく良い息子さんがいた。私より三年先輩であった。小田原中学へ入学し毎日小倉(厚地に織った綿織物)の制服で通う姿は、私の憧れであった。しかしながら、麟平さんが製茶事業に精魂傾ける余りに私財まで投ずるようになって、辰雄さんはどうとう中学を中退するようになってしまった。まことに気の毒なことであった。

或る時、麟平さんは、製茶工場のボイラーの調子が悪いと言う報告を受けて駆け付けた。そして、ボイラーを見ていると、それがたまたま爆発し、破片が麟平さんの頭に当り大怪我をされた。幸にして蒸気による火傷は無く命には別状なかった。

しかし、麟平さんは怯まず、翌日から事故の処理と工場の再開に取り掛かった。

現場に於て包帯姿で指揮している麟平さんは痛々しかったが、子供ながら崇高の感に打たれたことを今でも覚えていてる。

現在盛んに生産されている神奈川県足柄茶の発展の段階には、このような幾多の苦難の道があり、献身的に尽力された数多の方々が生かされたと思う。私は小学校を卒業すると村を離れてしまったので残念ながら以後のことは判らない。

## 足柄茶と狭山茶

関東地方でお茶の産地と言えば、足柄茶と狭山茶である。私の記憶では両者が世間に名を出したのは同じ時期だったと思う。ところが、狭山茶は新聞・テレビの報道により広く知られた。又、埼玉県の狭山地方は、丘陵地帯で作付面積が広大で、生産量が莫大であるからそうなることは止むを得ないことと知りながら、私は口惜しいと思う。だから私は、狭山茶の文字を見ると、むらむらと虫酸が走り、敵意を抱くのである。

昭和九年頃の話であった。村の製茶の生産が向上して来たので、農業会では、大

口需要家に対して販売活動を始め、鉄道の購買部国府津支部へ売り込みに行った。もちろん、細谷麟平さん以下数名が行ったらしい。話は順調に進み、品質・価格は難なく合格したが、納入するからには年間通して継続的に納入することや言うところで躓いてしまった。残念ながら量産されていなかったのである。

この話は、当時私の姉満利子が国府津の購買支部に勤めていて販売交渉の裏話をしてくれたので判ったのである。

## 茶の栽培適地

戦後間もなく、私は会社(日本鋼管(株)浅野船渠)の偉い方のお供で清水市の清水造船所の進水式へ行った。その翌日、静岡市内の繁華街にある竹茗堂と言うお茶の老舗に案内された。この舗は日本一高級なお茶を売っている有名店と聞いた。

その竹茗堂のご主人で、今は既に隠居している方が、舗の奥の茶室で店に来る顧客にお茶の接待をしていた。私は偉い方のお相伴でその席に着いた。ご隠居さんは可成り高齢のようだった

が若く見えた、お輪を尋ねると八十何歳とかおっしゃったがその年には思えない元気であった。

その長寿の秘訣を伺うと、この良いお茶を毎日頂いているからだと言っていた。

手前味噌のように思ったが私はさもありませんと頷けた。そのご隠居さんが引き続きいてお茶について語った四方山話を要約すると次のようであった。

昔からお茶の木と竹とは相性が良い、竹の生い繁る所には必ずお茶の木は育つ

### 小田原市長選

任期満了に伴う小田原市長選は、五月十九日(日)に行われ、即日開票の結果、無所属で現職の小澤良明氏(62) (自民、新進、社民、公明、さきがけ、神奈川ネット推薦)が、新人で政党役員の鈴木新三郎氏(49) (共産) を大差で破り、再選を果たした。

当選、小澤 良明

二、九八 鈴木新三郎

有権者数 一五、四三二  
投票総数 六、一三三  
有効投票 六、〇〇九  
投票率 四一、五%

のである。ご存知のように山城・大和・三河・遠江・駿河は竹林が多い、従ってお茶が生産される。お茶を扱う用具には竹筒・茶杓・茶筌がある、竹はお茶の香りを損わないのです。

次に手前共のように良質のお茶が生産されるのは、場所が限られます、当店の茶は安部川や大井川の川上の谷間の茶畑で生産されま

境に育った新緑の葉がこの味と香りを出すのです。埃が立ったり煤煙の立ち込める空気の悪いところでは良いお茶は採れません。

話はおも続いて、お茶の入れ方の講義と実演になり試飲となった。成程と感心し驚き入った次第である。

東京・大手町の東京産業会館で、全国のお茶の共進会が催された。当然のことながら、神奈川県清水村の足柄茶も出品されて、上位入賞したと、村に残って活躍している小学校の同級生加藤一君から教えて貰った。

### 小田原市長選挙 ポスター掲示場

注意 (No.122)

- このポスター掲示場は、小田原市長選挙の候補者以外の者は使用できません。
- ポスターは、立候補の届出の順序と同一の番号の区画にはってください。
- この掲示場をこわしたり、はらわれているポスターを破ったりすると、法律により処罰されます。

小田原市選挙管理委員会



おざわ良明

---

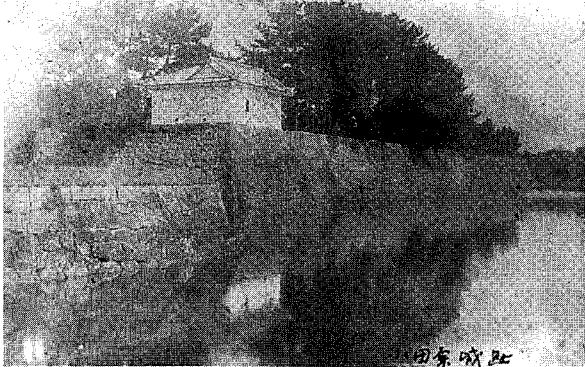
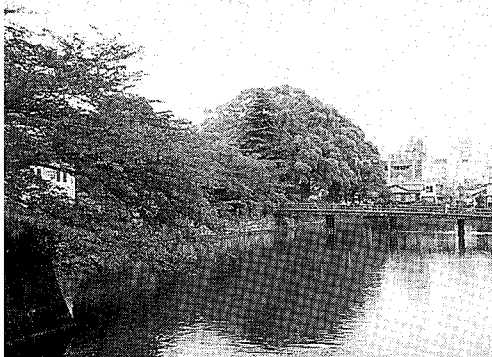
# 5月19日

## 投票日



鈴木新三郎

### 写真今昔



元本は絵葉書で、写真や印刷が現在ほど発達しておらず、また、歳月の経過で全体が不鮮明であるが、城趾公園が御用邸であった大正の初めの頃のものと思われる。

まだ、まなび橋も隅櫓橋もない。桜もつつじも植えられていない。右手には、キリスト教会、幼稚園、民家などなく、埋め立てられる以前の景観である。

ついでに記すと、当初の木造のまなび橋は、第二次大戦中米軍の相模湾上陸を想定して、敵に利用されるのを恐れて撤去された。



# 遭難記実

## 西南戦争に遭遇した

### 一市民の記録

佐久間 俊治

はじめに

いわゆる「西南戦争」は、明治十年(一八七五)、政府軍と西郷隆盛軍とが戦った歴史的事件として承知しているが、『船蹤萬里』(註：船の通った跡のこと)という書物に付録として載っている「遭難記実」という文を読んでびっくりした。

これは、当時熊本に住んでいて、この戦争に遭遇した橋本志茂と同貞吉という母子が、難をのがれて苦労する様子が記された、いわば手記であって、「歴史的な事件」がたちまち身近な出来事 느껴られたのである。一市民が体験した西南戦争としてめずらしい記録ではないかと思ひ、ご紹介を思い立った。

文中に出て来る当時九歳の橋本貞吉少年は、橋本家の系譜によれば、明治二年(一八六九)十一月生れである

へ入社、工場長を経て大正十四年(一九二五)退職、昭和三十五年(一九六〇)没した。九十一歳位の筈である。

『船蹤萬里』は、貞吉が八十四歳の晩年、自分の滞欧中の日記、回想等を整理しておいたものを、没後三十年経って孫の橋本定雄氏により発見され編集出版されたものである。

そしてこの本に付録として載っている『遭難記実』は、序文や文章から推察すると、貞吉少年の父橋本謙

前列左から、妹辰誉さん(後に、以前紹介した『あたまの藻屑』に出て来た海軍機関大佐吉松稜威磨夫人となる)、同佐那美さん、母志茂子さん、後列左が父謙作氏、右が貞吉少年すなわち、物語に出て来るけなげな少年の成人した姿である。そして、『船蹤萬里』の編者橋本定雄氏は、この少年のお孫さんである。



作が、志茂夫人から聞いた話をそのまま記されたものと思われるが、やはり、橋本家に伝わる毛筆・和綴じの私家本である。

なお、本稿は、橋本定雄氏から資料を提供していただき、ご指導をいただいたものであること、また吉松信彦氏に橋本氏との仲介の労を取っていただいたことを記して感謝の意を表す。橋本家系譜も引用させていただいた(文中一部敬称略)。

### 橋本貞吉滞欧日記の一部

○明治三十七年七月十四日(柳・河田両少佐と)伯爵久松少佐を其の私邸に訪問し、奥方の鯉の滝登りの浴衣に紫色の丸帯姿にて応接せられたるは非常な感激を受けたり。

○明治三十八年十一月十七日  
此日は佐渡丸に乗り込み神戸を出帆せし二周年に相当す。実に祖国を離れ七百十日目なり。轉た懐郷の念なき能わず。

○明治三十九年一月四日  
午前九時頃スパイタル町にて絹ハンカチーフと手袋、夜会服用ワイシャツを購入し、盛装して馬車にて、ムアーヘッドのキャンブリッジホールに、エリオット夫妻催の舞踏会へ行く。同氏の引合せにて各紳士淑女に握手し舞踏の番を待つ。一番のポルカより十番のガロップ、十二番のサー・ロージャのカバルレーに至るまで、流汗淋漓たる淑女のワキガの悪臭に耐えてサッパードンスに至り、ホルダー嬢とエンゲージの後、晚餐を共にし盛況裡にホーホーの体にて散会帰宿す。

遭難記實自序

オオキミノミコトノママニムラキモノ  
 大皇之命之任意村肝之  
 コロツクシノタビノソラミトセノ  
 心筑紫乃旅之空三年之  
 ハルラスグルコロツマコハオモヒ  
 春乎過頃妻児者尚毛肥  
 ノクニノタビノヤドリニノコソオキサツ  
 之國乃旅之宿似残置薩  
 マガタヨリ フナデシテ ウル  
 摩渇与理船出為而宇留  
 マノシマノサキモリトナリテ ツキ  
 間之嶋乃防人等成而月  
 ヒヲオクルマニアクルヤヨイノスエツ  
 日乎送間似明弥生之末  
 カタカゼノタヨリニヒノクニハサツマ  
 方風乃便爾肥國者薩摩  
 アラシノフキアレテイズチユキケム  
 嵐之吹荒而何地行計牟  
 ツマヤコノ ユクヘモサラニシ  
 妻耶尼之行方茂更似不  
 ラスヒトキクカナシサニウチハヘテ  
 知火等聞悲左似打延而  
 モノヲゾオモフオキナワノナミノクテ  
 物乎叙思沖繩乃浪之起  
 イモヤスカラデ アリフルホドニ  
 居母安加良傳在徑程似  
 ミナツキノ ハツカノヒシモユ  
 水無月之二十日志茂不  
 クリナクオハリノツカサキニケレ  
 意図後任之宦着任計札  
 バハヤコトオヘテオオフネニマホ  
 者速事竟而大船爾真帆  
 ヒキアゲテチカヘリスミニシアトラ  
 引揚三立帰住似志跡遠  
 キテミレバオバナガスエニアキ  
 来而見婆尾花賀末似秋  
 ノカゼヤケノハラトノナリニ  
 乃風燒之野原等叙成似

ケルカノヤマビトノムレニイリワズカ  
 計留彼仙人之群似入僅

ノホドノマレビトトナリテカエリテ  
 之程乃客人等也而帰而  
 フルサトノナナヨノゴニアイク  
 故郷乃七代之孫似逢多  
 リシソノフルコトモシヌバレヌ  
 理志其古事茂偲婆礼努  
 カクテツマコハアシビキノヤマニ  
 斯而妻児者足曳之山似  
 サマヨイサナトルウミタダイクサツサノ  
 彷徨鯨取海似漂種々之  
 ウキニタエツツモトクニノトサジ  
 憂似堪乍本国乃土佐路  
 ヲサシテチカエリマタノアウセラ  
 乎指而立帰又之逢瀬乎  
 マツラガタマツカイアリテコノハル  
 松浦渇待甲斐有而此春  
 ハツクシノナミカセシズマリテノドケキ  
 者筑紫之浪風鎮而長閑  
 ハナノシタカゲニマドインテミル  
 花乃下陰似團樂為而看  
 ウレシサニウカリシコトハユク  
 嬉左似憂加里志事者征  
 ミズノスキニシユメトナリニシ  
 水之過似志夢等成似志  
 トカタリシコトノモトスエラフデノ  
 等語志言之本末乎筆之  
 マニマニカキツズリソウナンキヅツトナツク  
 随意書綴遭難記実等名  
 ルニナム  
 留似奈牟

明治十一年春

熊本鎮台古城官舎

オウカラシマンソウカ  
花爛漫之窓下において

孤雲橋本謙識

天皇のご命令に従って心を尽くして筑紫(九州地方)に着任して(註・明治7年11月熊本鎮台附) 足かけ三年目の春が過ぎる頃、妻や児は肥之国(熊本地方)に残し置いて鹿児島湾から出航して琉球諸島の防人(註・上代から中古にかけて辺境防備に当たった兵士のこと)貞吉の父謙作は、明治9年6月、琉球分遣隊長として赴任した)となつて月日を送る間に、三月末頃、風の便りに肥之國は薩摩風が吹き荒れて、妻や児はどこへ行つたのか全くわからないと聞いて、長い間、悲しみ心配した。沖縄方面の様子もおだやかでないことが続いたが六月二十日、思いがけなく後任者が着任したので早速仕事をすませ、大きな帆船で帰り、住居に来て見れば、何と秋風の気配の焼野ヶ原になつてしまつている。仙人の集団に客人として入つて、わずかの間滞在して故郷へ帰つたら七代後の孫達に逢つたというあの言い伝えが思い出された。いろいろあつて妻や児は山中や海辺を歩き、苦勞しながら故郷の土佐へ向つて人々との再会を松浦渇で待つたかいがあつて、この春、筑紫の動乱がおさまりのどかな花の下の團樂で相まみえる嬉しさに、苦しかったことは水に流れて夢となつたと語つた事の終始を、筆のままに書き綴り「遭難記実」と名づけたものである。

明治十一年春

熊本鎮台古城官舎

おうからしまん そうか  
桜花爛漫の窓下に於て

孤雲橋本謙

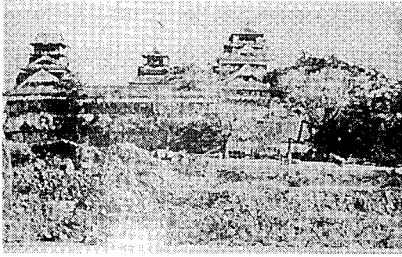
〔謙作〕が「謙」としてある。「孤雲」は号)

遭難記実

時は明治十年春二月、西郷隆盛が謀反を企て、兵を起こして熊本に入りました。陸軍の熊本師団は之に応戦して、市街はたちまち激戦の場となりました。

私はこの十五日、今年わずか九才になるわが子貞吉を連れて、家主である坂井さんの一家と一緒に、取るものもとりあえず熊本の町を立ち退いて城の東北二里(8キロ)ばかりの刷毛の宮という村へ行って、坂井さんの知り合いの百姓武平次さんのもとに逃れ、やっとのことで兵火を避けることができました。同十九日、城の本丸に火の手が上がり、

西南戦争前の熊本城



西南戦争で宇土櫓を残して他は焼失

黒煙が空をおおいました。この時五発の大砲とともに、市中は一面の火となり、その明りは数里(10数キロ)を照らして、市中の騒ぎは大変なものでした。老人を手助けし、幼い者をつれて逃げまどうありさまは、あの地獄にあるという阿鼻叫喚とはこのようであるうと思いやられました。二十日、二十一日になっても戦火は止まず、二十二日には、薩摩軍は早くも城の四方を囲んで、鬨の声や、大砲、小銃の音が天地も崩れるように鳴って、たちまち戦場となっていました。

私が考えましたのは、何としてでも長崎の方へ逃れて叔父上の許へ行くか、あるいはまた筑後(福岡県南部)の方へこっそりと行って、博多から船に乗って土佐の父上の許へ帰ろうというところで、あれこれ心をくだくうちに早くも薩摩軍は筑後の街道に一杯にあふれたと見えまして、木の葉地区、山鹿地区などで戦いが行われていることがわかり、戦場での物音などが手にとるように聞こえました。刷毛の宮地区の辺りは、負傷者や死者を運ぶなど、正視

できないようなありさまなので、とてもどの方向へも出発することもできず、しばらくはここにかくれて様子を見ることにいたしました。

そうするうちに、城下および高瀬地区、山鹿地区の戦いはますますはげしく、いつ終るとも思われません。飛びかう弾丸はあられのよう、また、軍勢の声は雷のようにやかましく耳元に聞こえて恐ろしく何もできません。さて、周りの人達の言うところを聞きますと、薩摩兵達は、官吏の妻や兒とわかることとさら薄情にするに聞くにつけましても、とても心細く思っていた間に、三月の十日頃だったで

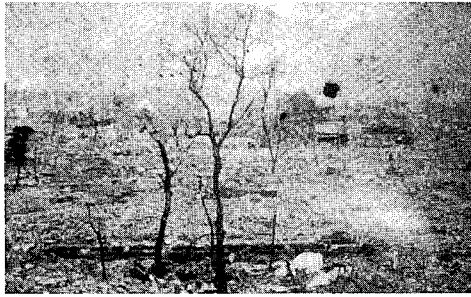
しょうか、武平次さんの隣の家に住た笠江某という人が近くの村で殺されたとき、取りあえずその家に行ってみますと、寸断された死骸を桶に入れたのを見てその母や、妻子が悲嘆にくれる有様は、そばで見ると痛ましく、哀れと表現したのではとても足りません。この人は、元熊本縣の警部を勤めたということを知り、だましつれ出し、このように酷いこ

とをしたのだということですが。私も官吏の妻ですので、武平次さんはじめ人々が気になる様子がとても心配なので、何とかして早く出立したいといろいろと心を砕くのですが、方法が全くありません。その折り、坂井さんの主人の勧めによつて、大急ぎで眉毛を剃り鉄髪をつけ(註・眉をそって鬚を黒く染めるは既婚者のしるし)て、坂井さんの娘のようによそおって、あたかも熊本の町人の家の嫁のような姿となつて毎日を過ごしながらも、なお周辺の状況を聞き合せましたところ、ある人の言うことに、二重峠から大分県の方へ出るには敵も少なく、十のうち八ないし九は通過することができ

それならそこへ行きたいと急いで人夫を雇って旅の仕度をして、坂井さんの主人が再び言うには、私達も今日から宇土の親類の方へ立ち退きたいと思っています。いつもはそこから鳴原へ帰る漁船もあるので、とにかく今日、そちらへ行つていろいろの様子をよく聞いて、支障がないようなら明日お迎えを出しましょう、

そこから長崎の叔父君の許へ行かれるのがよいと思ひますので、明日までここでお待ち下さい。もし明日のうちを迎えの者が来なかったら、その時こそは二重峠の方へ行かれるのがよいでしょうと、大変熱心に勧めるので、それにしたがつて、それでは明日までここで待ちましよう、と、堅く約束して坂井さんの家の人々を見送りつつ、心細いことに貞吉とたった二人で武平次さんの家へ留まりました。

明けて三月十七日の正午頃、宇土から迎えが来たので喜んで急いで貞吉の手を引いて、武平次さんはじめ人々に心ばかりのお礼のお金を置いて迎えの男に導かれて宇土の方へと出発しました。心づくしのおかげによる筑紫の旅は、行方も知らぬ不知火地方を通過して、そして思い立って立田の山を越えて、弓を引くように引かれて行く身は、矢嘯、陣内を通り過ぎてここがどことも知らずに白川の流れるように変化の節が多い竹の宮を通り、強く持った心を力にして、たどりたどりながら歩いて行つたのです。この辺りには薩摩兵達が、



焼土と化した熊本(市)

ここ、かしこに、小屋を用意して集って、往來する人々を見張っている様子ですが、お供の男が言うには、もし薩摩兵達がこちらを見とがめても、あなたは一言も物を言っただけいけません。私がうまく言いつくろいませから、と言うので、おそるおそるその前を通り過ぎて、やっとのことで六箇村に着いた頃は、赤い日ももう暮れて、夜の七時にもなっていました。お供の男はこの村の者なので、今宵はこの男の家に泊って明日早く宇土へ行きなさいと言うので、やがてその家に着きました。

そこは田舎の家のこととて、あまりきれいでなかつたのですが、昼からの心労と馴れない長旅に疲れ果てて、そのまま夜具をかぶって床に入りましたが、これまでのこと、これからのことなどを思い続けて眠ることができませんでした。

そして夜半過ぎと思える頃、誰か人が来たので、戸をコトコトと叩く音がします。主人の男が出て行ったところ「今夜この家に旅の女を泊めたという」とだが、このことがもし薩摩の人に聞こえたら大変なことになるだろう。一刻も早く追いつきなさい」と言い置いて立ち去りました。やがて主人の男がこちらへ来て、あなたも多分お聞きになったでしょうが、ただ今、村の者があのように言うて来ました。だから今から宇土の方へお供して行きたいのですが、こんなに疲れたの様子を痛ましく思います。どのようなにいたしましよるかといひます。ああこんなに疲れているのにどうして宇土まで行くことができようか。その上、貞吉を見るとこれまたひどく疲れたのでしよう、ぐっすり熟

睡しているのに、更にこれを起こして夜道を一緒に行くことはとてもできないことなので、何とか今夜はここで明かして、明日未明に出発させて下さい、とひたすら頼んだところ、主人の男も、不びんと思ったのでしよう、それならば今夜はここでお休みなさい。村の者の手前は私がうまく取り図らしましよと承諾してくれましたので、次の部屋に入って休みました。

明けて十八日、朝早いうちに起き出て、出発の準備などをしていますと、主人の男は、村の役の立番になったので、代りの者をよこしますといつて別の男を雇って来ました。まもなくその男を供にして六箇村を出発したので、この男も道の案内をよく知っており、幹線道路を行く時は長い距離を行き、もし薩摩軍が通る心配があるときは、こちらへいらっしやいと言って、とても細い田んぼの中の道に入って、緑川を渡り、隈の庄の右側と一緒に行きましました。この辺りは薩摩の影さえもないのでとても心安らから、初めて広い世界にいる心地がいたしました。

おひる頃、宇土郡宇土村というところの友井源真さんのところに着きました。この家には坂井さんの家族も来ていたので、これまでの途中のことを語り合い、お風呂に入って大分気持ちも落着きました。

同十九日、肥前の國嶋原(長崎県島原市)へ帰る漁船が、今夜十二時に出ると聞いたので、その準備などをして坂井さんの家族に、長い年月お世話になったお礼を言っ、日が暮れる頃、浜辺の船宿に到着したのでした。ここまで、主人の友井源真さんが、旅の荷物を運ぶなどしてくれて、坂井家の人々も見送りに来てくれ、皆さんとそれぞれ別れを惜しみました。そもそも、一本の樹の蔭に宿り、同じ川の水を汲んでわずかの時を過ごし合った知らない人同志でも、別れとなれば悲しいのに、まして、この年月、一緒に語り合い、つらいこと苦しいことを共にしたこの人達と別れたら、再び会うのは、旅の身の上のこととて片手だけで糸をよるくらいに難しいことと思われ、まさに断腸の思いでありました。午前零時を過

ぎる頃、あの戦場の叫び声や大砲、小銃の響きを記憶に、船人の船歌とともに、はるかな海路を漕ぎ出したのです。この時、雨までも降り出したので、苦(註茅などで編んだおおい)を被って横になっていました。同二十日の夜明け頃、海路は無事に肥前の島原の港に着きました。まもなく上陸して宿屋に着いて更に長崎への便船を問合せたのですが、最近はずっとないという事です。それなら車はあるかとたずねますと、車はないことはないが、若い女の一人旅は、車夫のために悲しい目に合うと聞いているので、船を借り切りなされた方がずつとよろしゅうございませよと言います。本当にそのようなこともあろうと新たに船を雇って正午頃島原の港を漕ぎ出しました。風がよくないので、とある山間に船を繋いで夜を明かしました。次の日ここを出発したので、風はもっと悪くなりました。再び長崎湾の口の津という山間に船を繋ぎました。翌二十三日には風がややよくなったというので、口の津を出て、海上数十里

あるかとたずねますと、車はないことはないが、若い女の一人旅は、車夫のために悲しい目に合うと聞いているので、船を借り切りなされた方がずつとよろしゅうございませよと言います。本当にそのようなこともあろうと新たに船を雇って正午頃島原の港を漕ぎ出しました。風がよくないので、とある山間に船を繋いで夜を明かしました。次の日ここを出発したので、風はもっと悪くなりました。再び長崎湾の口の津という山間に船を繋ぎました。翌二十三日には風がややよくなったというので、口の津を出て、海上数十里

も来たと思う頃、一天にわかにかきくもり、強風は船をひっくり返そうとします。船頭は楫を取り、あわてうろたえて右に左にと力一杯に櫓を漕ぐのですが、大山のようにやって来る波にはどうすることもできず、帆柱は倒れ、楫は折れて、ただ波にまかせて漂うのです。そのうちに風はますます荒くなり、次第に大海に吹き流され、前後左右は広々としてはてしなく、山の一つも見えません。船は今にもこわれそうです。側にいる貞吉はと見ますと、小さい両手を合せながらうつ伏せになっている有様は、幼い心にもこの災難をのがれようと神の助けをあおいでいればこそと思うと胸ははりさけるようで、涙を止めることもできませんでした。

思いかえせば昨日まで、銃砲の煙や弾丸の雨の中にあり、野に伏し山にさまよって、今日またここに海の神にまであわれにも見はなされて、海底のもくずとなる。すると、虎の口を逃れたら次には大魚に食われるという、無常のたとえと同じです。いつの世、どんな罪があつてこのような悲しい目に会うのでしょうか、ただこの上は、もろもろの神に祈る外はないと心の中に祈るのは、焼かれた野原の雉や夜の鶴が、わが子を思わないなんてありはしないと聞きましたが、我が身の運命が不幸にしてこの海原のもくずとなるにしても、幼いこの子だけは、神のご加護があつて、どこかの海辺に流れついて、その後無事に守って下さいということとで、一心に誠をこめてお祈りしました。こうしているうちに、神様もあわれに思われたのでしょうか、翌二十四日の明け方には空が少し晴れ、風が静まり、遠くに一つの陸地を見ることができました。船人達はこの力を得て、櫓をこぐ声を合せて陸に近づくと、陸からも五、六艘の助け船を漕ぎ出してくれ、やっととある浜辺に漕ぎつきました。

さてこの地は、肥前の国の千々岩という貧しい海岸の里なのですが、里の人々が多勢集つて来て、みんな私達親子の無事を祝つてくれながら、とても丁寧にもてなしてくれました。そのあとお茶をいただくとうと海

辺に上つて貧しい家に立寄ると、この家の女房はとても誠意のある人で、私達母子をいたわってくれ、茶をわかし、芋などを焼いてもてなしてくれましたので、しばらくこの家で体を休めました。この時貞吉は、浜辺に出て砂を盛ったりして遊んでいましたが、巡查が来て、姓名などたずねたところ、貞吉はこまかく、本籍や住所氏名を言い、父は陸軍少尉で去年の七月から琉球に勤務していることなど、もれなく答えましたので、集つた里の人々はみんな口々にその利巧なことをほめたということでした。巡查はこのことを筆記してなお心からいたわつて帰りました。

この夜はここで夜を明かして翌二十五日は、この海岸に鎮座される金刀比羅神社の祭礼ということで多くの人が参詣するので、私も昨日のお札に参詣しようとして、高い山を登りまして後の事までもお願いして帰りまして。この時すでに船の修理もでき、天気もよいので、これからすぐに船出ししようと午前十時頃、千々岩の海岸を漕ぎ出たのですが、海面はまるで砥石のように平らで、船足は遅くもどしかなかったのですが、一艘の小舟に、商人が五、六人乗つて長崎の方へ行こうとしているのがあり、船頭にわけを話して海上でこの小舟に乗りかえ、午後二時頃、無事に綱場の港に着きました。ここでも巡查がやって来て調べられましたが、私が熊本から来たと聞いて、戦争の様子などきかれましたので、見たり聞いたりした事などを話しましたところ、くわしく手帳に記して帰って行きました。それから人夫を雇い、荷物を持たせて、陸路を通つて日見峠の険しいところを越えて、日が暮れる頃やつと長崎にたどり着いて、そのまま叔父君の家に行つてみるとこれは一体どういうことか、叔父上は四日ほど前に國へお帰りになったというのです。神ならぬ身のなさけなさで頼みの綱も切れ、再び途方にくれ果て、頼りに思う人影を思つて近寄れば、松の木でその露にまた袖をぬらしってしまったと昔の人が歌に詠んだのは、このようなことなのだろうと思ひ出されました。あるべき筈の頼るところがないので、神戸の方へ行く人があるかと問い合せますと、藤崎義光さんが東京へ帰られるので今夕船出なさると聞きすぐに使



『遭難記實』終

## 震災日記

## 片岡永左衛門

大正十二年

十月廿六日

破潰の自宅もやや片づく。協議会の結果、二十四日、当町会に於て当町復興臨時委員に当選の通知あり。

廿七日 晴

廿八日 曇

龍夫(永左衛門孫)帰京も一両日に迫り、震災中の悲惨なる根府川(小田原市)を一覧し度しとの事にて七時半兩人同行。早川(小田原市)も可成の被害。鉄道線路は甚だしく破壊され、道路も破潰のため村端より鉄道線路を縫って歩行す。石橋(小田原市)に至れば、村中に架したる高架の鉄道は、二三方所陥落したるが、被害は早川より少なきが如し。破潰の真田神社の坂下を過ぐれば、道は海中に陥落せし。断崖絶壁を纒かに歩行の跡を付けたるばかりにて、その危険は言語に絶せり。手に汗を握り漸く通過し、米神(小田原市)の

村に達し山上より見下せば、村の中央は、山津波にて破潰し、十九戸は一カ所に埋没し、その跡は新に小山となり、頂辺に追弔の塔婆を新しく建てり。この地は石橋以上の被害なり。

破潰の道を右、左に迂回し、倒壊して更に焼失せし

根府川小学校を少し行き過ぎて小丘より見れば、熱海

線根府川停車場の建物は跡形も留めず、海岸迄墜落と

共に数十戸埋没し、所々に温州柑の見ゆるは、付近の

柑橋畑の右方の山上より陥落し来りたる跡を留めしなり。

目を奉ずれば、前方に新たに高陵の出現せるは、強

震数分の後に二里余りの奥に在りし。聖嶽の一部崩壊の

結果山嘯となり、谷川に添って押し出し来り、海中に及

びし数十の人家も田畑も埋没せしに、殆ど同時に谷川

の上流にありし発電所の堰堤の破潰し、貯水は、一時

に激流し来り、押し出しせし土石を押し流し、谷川を

形作りたれば、此処に居住

したる者は、耕作又は出稼ぎに出居りし者の外は、殆ど全部圧死、今日に至るも発掘出来ざる者多しと惨の惨たり。

溪頭の石上に腰を下ろし、握飯を食しながら熟視すれば、埋没の隧道口には数名の工夫働き、数組の鉄道省吏は測量に従事するは、熱海廃線の説を伝うる者有るも、近々工事を進行するの準備ならんか。

これより引返し、往路と反対に米神より山を登り、

真田社の脇を下り、龍夫の守りをなせし石橋村の某方

立ち寄れば、竹も在宅し、龍夫の幼時など談話し大喜

びなり。十二時帰宅。

廿九日 晴

午後三時帰宅すれば、福田氏来りしに引き続き横浜

金子忠蔵見舞に来り、持参の胡麻油にて、細君芳子

(永左衛門娘)は、俄に天麩羅を料理し晩食せり。震災

以来の馳走にて大賑い。十時一同就床。

三十日 晴

細君、龍夫、横浜に立ち寄り上京に付、金子、福田も同行し、家内は俄に淋し

退出の險途、関氏に立ち寄り、同家前途の方針に付き相談を受け四時帰宅。帝國火災保険代理店第二四評議員会に出席のため、九時五十分発にて京都に出発。国府津にて東海道線に乗り替れば、雑踏甚だしく座席を得ず。同乗者の荷物に腰を下ろす。車中地震談に花を咲かし、豊橋駅にて漸く席を得たり。

三十一日 半晴

前六時半名古屋に着し、震災にて東京より避難の園

井町前田眼科医を訪れしに、機械焼失せし旨にて要領を

得ず。又、十二時四十分、汽車に乗り山科駅に下車、

人力車に乗る。京都の家屋竹林、樹木も別趣多し。動

修寺の門を入れば、菱形の敷石は他と異り、玄関に案内を乞うとも人気なし。右

方に廻り内玄関に又案内を乞えば、漸く出来る、拝

観を求むれば、法衣に替りて案内す。転た感じたるは、

土佐光起の壁襖は、筆力勇健にして鑑賞の眼益を得た

ること少なからず。又、庭園は所謂勤修寺式にて一種

の風致を備えたり。辞して又、車に乗り三宝院に至り

拝観を乞えば、内玄関には梵妻なるか四十ばかりの婦ありしは、この靈地に在りては、静寂の心を汚されし感を生ぜり。桃山の遺物枕流亭唐門を観覧す。観花亭は、今修繕中にて充分の観覧を得ず。秀吉が醍醐の花見の幔幕に擬したると云う赤地、桐を白く抜きたる幕を画きたる屏風などを見て、門前の茶亭に入り靴を草鞋に替えて、再び寺門に入り、天曆五年(一五五二)に建築の藤原式の五重の塔を翠松(松のみどり)の間に賞観す。松杉に狭められたる道は、爪先走りとなり一路閑寂なるも、伝統を掛け連がりたるは、夜の参詣には便利なるべきも、少しこの境地としては不相応の気もする。樹間より眺観すれば、また風景にも非ず。

途中に茗軒の茶亭有り。そこより道は急坂となり、歩行埒あかず。独り老来を黙感せり。西国十一番の准堤観音堂に賽すれば、折柄降雨となり、自動車発車の時間を氣遣い是より下山せしに、途中京都の二少年と同行となる。四方山の談話しながら三宝院前の茶亭に入り小憩して、自動車を待

ち合いて共に乗る。二少年は、余を木屋町迄案内せらる。好意を謝し、大野屋旅館に着すれば東京支店長も来り来会を謝され、食後、都築嘉兵衛来り自力他力善行等の対語となり、昼の疲労も忘れ心地よく就床す。

十一月

一日 晴

八時、一同と会場岡崎公園、市公会堂に至る。堂は、御大典の演舞場を市に下賜せられしにして、荘観美麗なり。九時開会、小原社長の挨拶と説話、第一四、第二四評議員の連続当選者表彰のため金製メダルを賞与せられ五時閉会。大野屋に入れば雨となる。同室者四人と新京極を散歩すれば、活動等の興行物は賑敷人出の多きを見るにつけ震災と思えば羨の念は起さずして、返って陥落を知らず。浮々遊び狂いを気の毒なる心地す。少しの買物などする内に大雨となり月なく帰宿す。

二日 晴

今日は議席をサボり人力車を走らせ、午前三時半に京都駅より乗車す。空は曇り風も加へ、須磨、明石も

風情少なく、車窓より旅の気分を味あい加古川に八時半に着きたれば、三木行は十時にて、せわしき身を停車場に待ち飽き、十一時に三木の井出家に安着し、種々慰安を受け同家を辞し、金物会社にて土産を買い、一時半発に乗り、六時に大野屋に帰宿せしに、同宿の同人より演劇の観賞を勧められ躊躇せしに、既に準備せしと聞いては、強いて否むを得ず同行したるに、当市舞子の総見にて其の人形の如き風俗も目新しかりし。十一時帰宿す。

三日 晴

京の名所も度々にて見飽きたれども、この一日を如何に暮さんと昨夜より考え、紅葉は少し早きも、三尾行として二条より汽車に乗り嵯峨にて下車し人力車に乗る。流石に郊外の床しさを車上と感じ、真言宗大本山大覚寺に入り拝観を乞う。当寺は嵯峨帝の離宮にて、南北朝講話もこの寺にて行われ、いま目の当りその室を拝しては感慨無量なり。当時の遺物諸堂を拝観す。宸殿は往時紫宸殿を下賜せられしにて、宸殿の庇より

往古は離宮の庭地なりと云う。大澤の池を眺観すれば案内の雑僧は、池内の小島を指し、菊ヶ嶋と称し境内に咲き出しし菊を愛させられ、上皇の御座所に挿せしを濫觴として華道の道場となり、池ノ坊の名もそれに因るなりと。

門前より待たせし車に乗り、松樹繁茂の間を行き、嵯峨帝の御陵を遙拝、長刀の急坂を抜け梅ヶ畑に出ずれば、風俗異なる婦人と見て、木材を積み載せたる牛車はカランカランと音を立て行き来す。紅葉時とて路傍に物売の掛茶屋も多く、茶を招ませし明恵上人の再建の榎尾高山寺なる吉水院に至り、尼僧に案内せられ溪を隔てて前山と眺瞰すれば、紅葉の名所も未だ青葉に失望せしも、山寄り水簾には又捨て難き思いあり。崖道を下り溪畔より橋を渡り榎尾西明寺を拝す。清瀧川に添って緩歩し、和気清風の創建なりと聞く高雄山神護寺を拝し、道せまき楓樹の間を爪先登りに行けば、ここも掛茶屋多し。少し空腹を感じたれば、茶亭に入り紅葉餅と云う道明寺粉に小豆餡を付けたるを食

し、小憩して又参れば、地藏院にて清瀧川の溪流に臨み、高雄の観楓には第一の勝地にて、山路の紅雲推裏金蛇掣くとは云い得て、甚だ妙。帰途は御室に出て、車上より飽く迄郊外の趣味に浸り、仁和寺停車場より乗車し二条にて下車し、駅前にて一杯の狐籠鮎に饒かに空腹を癒し帰宿すれば三時なり。

四時より同宿の代理店諸氏と会場八坂俱樂部に徒歩にて同行せしに、その内の一人は前夜よりの談話に当市の地理事情には精通の様子なれば、安心して随行し丸山公園に入りたるに、俱樂部は遂に見当らず、少し眉唾を感じたれば、糸桜を指示し、是は糸桜なるべきも、先年よりは樹梢に衰勢有りとの談話しかけしに、私は此処は初めてなりと本音を吹きたるに馬鹿ばかりしくなり、交番にて聞けば、右に行くべきを八坂社と云えば、その付近なるべしと即断し、左に坂を参りしにてまた鳥居を出て坂を下り、右に入り漸く俱樂部に入りたるも、また一興なり。五時半開宴し社長の挨拶有り。余興に東山名所の舞

春日龍神の囃子、三神の舞有り、舞子芸子の京美人は酒間を幹旋し、九時頃に帰宿、明朝出立の用意などして十二時頃に床に入る。

四日 晴

人力車にて京都駅に駆け付け、五時五十分湊町の汽車に乗る。

今朝は風甚だ寒し。桜井にて初瀬軌道に乗り替え初瀬に着せしは八時。自動車の乗合を待ち榛原にて又乗り替え、大野に着せしは十時なり。是より徒歩、教えられし道を行けば、京の梅畑にて見し如き材木を積みたる牛車に行き違い、宇陀川に架し橋を渡れば杉檜の生え茂る林中の道となり、林を出て室生川に沿って離れ離れては又沿い、橋を過ぎては又橋を渡り、道を挟む左右の山は魯え立ち、松杉に黄葉紅葉を交え、或いは岩壁高く峙ち、千那馬の溪中と行く思いあり。所謂、顔も思うし足の進みと忘る。

山水に紅乗り

忍ぶ室生山古き

匠の跡をのみか

(続)

# 生かされて

## 私の軍隊体験(4)

### 磯部正人

戦況の変化と共に

北滿を転々と(3)

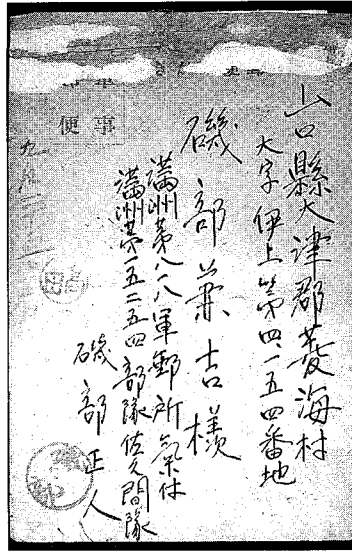
昭和二十年五月の始めに  
又転属があることを聞かされ、ひょっとしたら内地へ

帰れるかも知れぬと思ひ  
案の末、人事係准尉に転属  
希望を申し入れました。准  
尉は内地へ帰れるかどうか  
判らぬぞと云ってくれまし  
たが、私から云い出したこ

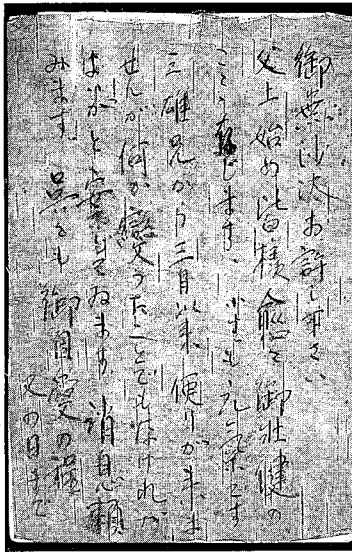
とだから致し方ありません。  
五月十日、迫撃第十三大隊  
から、鈴木西之助中尉以下  
百名が、新編成の野砲兵第  
百二十六聯隊編成要員とし  
て転属し、五月二十日編成  
完結、虎林とは百五十キロ  
南西の滴道に駐屯いたしま  
した。

この時に身の回り品等は全  
部留守隊の兵舎に置いて行っ  
たのですが、ソ連侵入と同  
時に留守隊員が兵舎に火を  
放って本隊合流のため出発  
したので、大事にしていた  
軍隊生活の記録写真を整理  
していたアルバム二冊と、  
入営まで横浜に勤めていた  
時、下宿して居た松竹大船  
撮影所大道具係の橋武さん  
のお骨折りで作って頂いた  
寄せ書の日丸の旗等も全  
部灰になってしまいました。

は、撮影所の社宅(撮影所  
の東隣)に居られた前記橋  
武さんの所に、一間借りて  
食事も作っていただいでお  
りましたが、附近をぶらっ  
いております時に、よく皆  
さんの出退勤時にお見かけ  
することがありました。先  
ず上原謙さんは、きちんと  
背広を着られ勿論ネクタイ  
もしめて、ピカピカの靴を  
はいて、頭もきちんと手入  
れをして大船駅から歩いて  
来られ、徳大寺伸さんも上  
原さんと似たり寄ったりで  
した。ところが、佐分利信  
さんは、ノーネクタイで上  
着なし髪はボサボサ、履物  
は幅広の下駄をつっかけて  
カラコロと大きな音をたて  
てご出勤でした。この性格  
がそのままピツタリに作品  
に現れて居たことを覚えて  
居ります。又、女優さんで  
は田中絹代さんの楚々とし  
た美しさに惹かれたもので  
す。桑野道子さんも、大変  
綺麗な方でしたが、特に美  
しい足で颯爽と歩いて居ら  
れた姿が目に見えて参り  
ます。



終戦の一寸前位に父宛に出した最後  
のはがき、父が鉛筆で9月25日着と  
記している。これを最後に私は親達  
に取っては行方不明、生死不明の満  
4年間の大変な苦しみを味わわせる  
ことになる。  
なお、私の本籍は山口県ですが、旧  
制中学校卒業後、戸塚の第1海軍燃  
料廠に勤務し、大船に下宿していた  
関係から、ここで、寄留届を出した  
ため、入営先は神奈川県出身者



と同じ甲府の歩兵第149聯隊でした。  
はがきの裏側、表書でも私が満洲の  
何処に居るかは判らない。又、この  
はがきは何月何日に書いたのかも書  
いてない。軍隊の機密保持上、何も  
書いてはいけなかったのです。はが  
きに貼りつけてあるのは白樺の樹皮  
を剥いだもの、寒い北滿に居るこ  
とを家族に暗に知らせる手段として私  
が考えてしたことでした。

一杯でした。当時、大船  
撮影所の門前の道路の左側  
に三笠と云う喫茶店があっ  
て、そこが皆さんの溜り場  
みたいになって居ましたが、  
このお店で皆さんが寄せ書  
きをして下さったのです。  
ついだから当時の事を  
二、三書き記しますと、あ  
の頃は、皆さん電車で通勤  
なさっておられました。私

笠智衆さんは、お年を召  
されてもお若い時のままの  
お姿や仕草が出て居ります。  
私は、この人の平民的でい





昭和23年夏、箱根強羅で開かれた、迫撃第13大隊第2中隊有志が発起の戦友会。やがて大隊単位の戦友会に発展。

ばらない所が大好きでした。大展子山に入ってからは毎日毎日来る日も来る日もじりじりと焼けつく炎天の中で相も変わらぬ濠掘作業の連続でした。中隊長佐久間中尉以下数十名に、七月に在満の現地召集で入隊した第二補充兵(詳細は記憶にない)を合わせた人員であつたが、補充兵は、身体が弱く、しかもかなりの年配なので、作業は余りはかどらなかつた。私は、当時軍曹だったので、私より上級の下士官が居なかつたので中隊人事係を拝命し、各種書類の作成整理、勤務

割当、その他の事務につきながら、暇を見つけては濠掘りもして居りました。六月、七月と過ぎ誰言うとなく南方戦線の戦況不利の噂が拡がり始めて居りました。

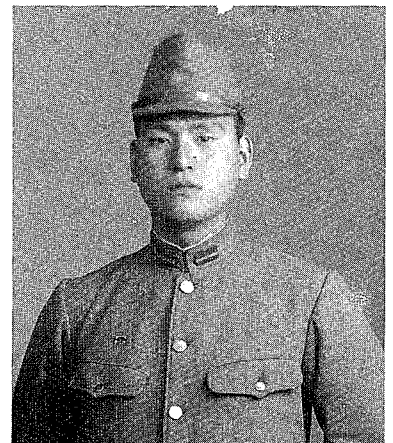
運命の日

確か八月九日の朝だったように記憶して居りますが、飛行機が現われて何回となく旋回して居りました。最近友軍の飛行機はちっとも見掛けないのに今日は珍しいなあ、何事だろうと思つて居りましたが、間もなくソ聯が不可侵条約を破棄して参戦、国境を突破して侵攻中なることを知らされ、

これはまずいことになつたなあと思つたことでした。その中に部隊に「牡丹江に集結して敵を激撃せよ」の命令が下りました。いろいろの軍装品は、留守隊の兵舎に置いてあるのだけ

れど、取りに行く時間はなく軽装で出発したのでした。その時、中隊に兵器は殆どありませんでした。内地守備のため兵器は殆ど引き揚げられて、迫撃中隊なのに迫撃砲は一門もないといった状態でした。三八式歩兵銃も中隊で二十挺もあつたでしょうか、銃剣も殆どが竹製のもので誠に怪しい中隊装備でした。それで急遽、兵器廠で迫撃砲一門、各自手榴弾二箇、戦車地雷一箇を受領して牡丹江守備に出発したのでした。私は、拳銃一挺を肩に吊し軍馬に跨り、佐久間中隊長と共に前進いよいよ実際は前線より後退しました。

前傾姿勢となり、手綱を操りながら右手のむちで馬に気合いを入れながら疾走する時の快感は凄かつたね。人馬一体まさに字の通り。乗馬のあとは丁寧に手入れをしてやり、馬の気持ちよさそうな目を見ると誠に可愛いものでした。



兵長時代の筆者 昭和18年

夕方になり露営をするころになり準備をしている時に、扇のマークをつけた懐かしい迫撃第十三大隊のトラックが通過します。よく見ると戦友荒井幸一兵長ではありませんか。早速停車して再会をよろこんだことでした。そして、清酒、甘味品(羊羹)をおろして呉れました。暫くしてお互いの武運長かれと、はげましい合いながら別れたことでした。戦友は有難いもの、この戦闘のさ中でもこんなにして呉れるのです。荒井氏は、現在横須賀市野比に住んで居られますが、沢山の貸家を持ち、花作り等を愉しみながら悠々と暮らして居られる様子です。戦後殆ど毎年開催している戦友会にも、箱根、熱海、湯河原、那須と四度ばかり出席いたしました。その度に会つて兵隊時代を語り、又、現在の生活の話など楽しく話つた思い出があります。荒井兵長から頂いた酒を皆と飲み、その晩は、戦闘中であることも忘れて、ぐっすりと眠りました。十一日の昼頃、掖河の山に着きました。

此処が我が第八中隊の陣地構築をする所でした。我々の左に工場があり、遙か二千米位の正面に市街地が見えました。この山の稜線のかげに中隊唯一門の迫撃砲を据え、明日からの敵攻撃の據点といたしました。

(続)

# 材木屋綺談 その三



たかた・きくせん

銘木商は複雑で美しい柵目を珍重する。ところがそのような柵目には、少なくなるとも三百年以上の樹齢でない」と形成されない。つまり神社か寺院でなければ存在しないのだ。従って銘木業者は全国にネットワークを持ってそのような銘木を探す。

古い話だが、大正十二年(二二)の関東大地震の折りには、私の家の店頭には伊勢国産と書かれた柵の柵目盤が飾られていた。その傍らに腰かけていた私は、長さ三米巾九十糎もある柵の柵目盤の下敷になることすら危く逃れることが出来たが、その柵目の美しさは当時小学六年の私の脳裡に今でも生きています。

柵や柵の柵目には玉柵又は如輪柵と称して目玉のような円形がたくさんつなげて浮んでいる天然の美を見ることが出来る。銘木を扱った私は今までにこの美を鑑賞する機会を度々得た。

史談会でも今まで各地に歴史探訪を催したが、材木屋であった私は、歴史のことだけでなく、神社寺院の建物に使用された木材にも興味をもって探訪している。今まで見た玉柵で記憶に残っているのは、豊川稲荷山門の扉に使用されていた柵の

## 希少価値の玉柵

たまもく

玉柵である。銘木業者にとってはまさに国宝物である。成田山新勝寺本堂側面の「膜板」に使われた柵の柵も素晴らしいが、今でも強く印象に残っているのはフーテンの寅さんで名高い柴又の帝釈天本堂の側面の柵玉柵は、その美しさに堪能して堂を二周したほどである。

柵の玉柵ばかりのことを書いたが、玉柵は柵の古木にもよく見られる。当地方では戦前までは柵細工が盛んで、私の銘木商売も半分

は柵であった。それが戦時中柵は樟腦の原料とかで全国的に伐採禁止となり、以来当地の柵細工は全滅したのである。今では熱海に僅かながら専門店が残っているが昔日の感はない。

しかし、照葉樹林地帯である伊豆相模の沿岸地帯には柵が今もよく繁茂している。これらの巨木の中には、玉柵の出そうな古木も多いのだが、いづれも重要指定木になっているので、これを伐ることは出来ない。それらの二三を挙げるなら、

手近かで誰でも識っているのが湯河原御所神社前の柵巨木である。地上三メートルから地へ向って堂々と根を張っている瘤のような樹幹はあれは玉柵を内在している姿である。これが売物なら銘木業者はさぞや涎を垂らすことであろう。熱海の貴宮神社にも柵の巨木があるし、伊東市にある伊東祐親の菩提寺のすぐ下に在る柵大樹はまさに神霊宿るかとはばかりの姿で見る人を畏敬させずにはおかない。

## 国府津丘陵

手前は御殿場線

(平成八年五月十日撮影)



(続)

# 丹沢の植物

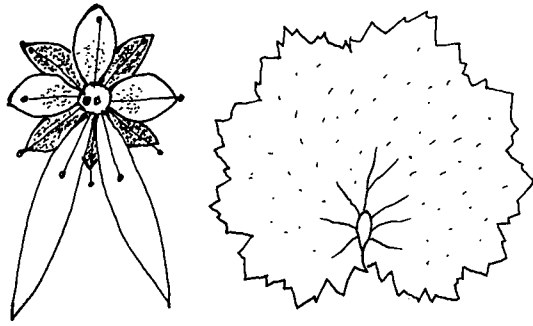
⑳

城川四郎 きがわしろう

人里の湿った石垣などに生えているユキノシタは一般によく知られている庶民的な野草である。腫物の膿を吸い出す効用があるとか、テンプラにすると美味しいという。普通、五月か六月に花を咲かせる。このユキノシタの花は面白い形をしていて、一つ一つよく見るとなかなかの芸術品である。

ユキノシタに似ている近縁の植物にダイモンジソウというのがあり、これは花の形を大の字に見立てて名づけたもので、秋に花を開く。生える場所が人里ではなく、群生しないので気品を感じさせるのか山草愛好家に親しまれている。さて、ここでご紹介するのは、やはりユキノシタに

ハルユキノシタ (ゆきのした科)  
*Saxifraga nipponica* Makino



花の拡大図

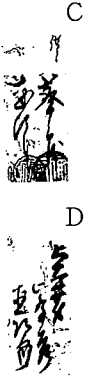
筆者原図

よく似ている近縁のハルユキノシタである。ダイモンジソウは、山地の溪流沿いの岩場などで全国的に見ることができ、ハルユキノシタはそういうわけにいかない、やや珍しい植物なのである。神奈川県では丹沢だけに産し、箱根には分布しない。馴れない人はユキノシタと区別できないかも知れないほどによく似ているが、ユキノシタが早くても五月中旬にならないと咲きはじめないのに、ハルユキノシタはその名のよう  
に春四月にはもう花を開く。関東、中部、近畿の各地に分布するが、それぞれの分布地は隔離されていて、興味深い分布様式を示す。  
神奈川県でも丹沢全域には分布せず、丹沢北部と東部だけに見ることができ、宮が瀬の水没地域が日本の分布の東限にあたり、この貴重な植物の自生地の一つが失われるのは惜しい。葉はほぼ円形で径約六厘、十五ほどに浅く裂け、縁に鋸歯がある。花茎は二十厘ぐらいで白い花を着ける。谷沿いの湿気の多い斜面などに大きな群落をつくる。

(続)







C  
D  
この文書の裏にあったDから決めた。  
(お詫び)  
前回の「古文書講座15」の標題は、「ねずみ・満水と天明飢饉」とすべきところ、講座14の「名主連の職人賃金引下願書」そのままに、表示されたことをお詫び致します。  
(編者)

## 酒匂と言つ地名の起りについて(2)

川瀬 春雄

一相模風土記の

記述について(続)

(三)酒匂川逆川説 『海道記』を援用して、逆川とは

今の酒匂川であろうと「この川当所にて海に入れば汐水逆流せし事もあるべし今は絶えて逆流せず」と記している。正しくその通りで筆者も約五十年の間にそのような川の逆流する場面に二度程会った記憶がある。それは台風気味の強い南風と上げ汐の重なった時であると思う。一号国道に架る酒匂橋の百米も上流迄(汀線から約四百米)小さな波を立てながら海水の逆流する光景であった。このような事は一、三十年に一回位

であろう、今は絶へて逆流せずと言ふのも符合するようである。  
このような逆流現象によって川の名となり宿場の名ともなったのではないかという。『海道記』を記した鎌倉期の文人は、おそらく「さかわ川」を渡ってこの地に一泊した時地名をきかれた土地人は「さかわ」と答えただけで酒匂の二字には觸れなかったであろう。これをきいた作者は、安易に酒匂川の逆流現象と結びつけて、「さかわ川」「さ

かさ川」の呼び方が地名の起源であろうとしている。風土記の記述も当時の呼び方がいかに混乱していた

かの如くにみえるが、これは紀行文の無責任な推理から「逆川」「さかわ川」「さかさ川」等と呼ばれたと書いているからである。  
しかし、この土地には『海道記』の書かれた時代より三百年も以前から酒匂と呼ぶ地名が明確に存在した筈であって、『海道記』当時の土地人がこの様な呼び方をしていたとは考えられない。旅行者に地名をきかれた土地の人が「酒匂」と言わずに「さかわ」とだけ答えた事が後にまでこのような混乱を残したのである。ここでも川の逆流と「さかわ」の地名を結びつけようとしているが、風土記もこれを問題にしていな

いようである。

奉拝借御金之事

一金五両也

元金式兩也  
利式歩  
運上式歩

三朱八捨四文 残

右者、私共鮎川殺生仕候付、新網仕立入用

奉拝借候所実正 御座候。御返上納之儀、年

老割式分之月割御利□ヲ加へ、當寅十月

廿五日限り元利相揃、急度御返上納可仕候。

萬一相滞候ハ、加判ノ村役人引受、急度竹御上納

可仕候。仍如件。

(慶応二年)

寅 三月

上大井村  
c借主

峰 蔵  
直次郎  
新兵衛

(七名略)

組頭 岡右衛門  
水走 又五郎

鮎川御役所様

後に「按ずるに」と風土

記の意見が述べられている。

これは、前記のような逆川

説と違って、酒匂の勾の字

に強くこだわっている古書

に、「岩和田、岸和田、佐

川田等の地名のわだとは勾

の字なるべし」とあり勾と

は海川の曲り目を言う。

「当所酒匂川海に注すると

ころ地形湾曲をなせり」  
「村名勾の字を用ひたるは

「さかわだ」と言うべきを  
何故か「だ」を略して「さ  
かわ」(酒匂)になって了っ  
たと結論している。

この論據となつてい  
る「酒匂川の海に注する所地  
形湾曲をなせり」とあるは、  
一体何を指しているのか、  
最近の酒匂川の川尻の様子  
を一見しただけでは具体的  
にどのようなことなのか理  
解し難いが、この所に立っ

た

てよく見るならば、それは、川が海に注ぎこむ川尻がなぜか東に曲がっている。ここに言ふ地形湾曲とはこの事であったのである。二十数年前の一時期、こうした川尻の曲流現象が強く起こり、波打際で東方に曲がった流れが砂地を六、七十メートルも勢いよく海中に流れこんでいた。それも、時には台風等による大波と大雨での川の増水に押し流されて姿を消したかと思えても、半月も経つと又同様の曲流現象を起こしていた。

それではどうしてこのような現象が起きるかと言えば、それは、酒匂海岸の汐流の作用によって起こるものであって、何びとにも容易に理解できる事である。そこで相模湾沿岸の汐の流れを文献によって調べてみると、それは、必ずしも一年中一定したものではなく、自然条件等の変化によって流れの強弱コースの多少の変動があると言う。基本的な流れの型としては、伊東沖あたりから沿岸を北上し小田原沖を東へ二宮あたり迄流れ、又一つは、三浦半島のあたりから西に向けて流れ、平塚沖を経て二宮

沖でこの二つの汐の流れがぶつかっていると言う事である。

川尻の曲流現象は、このように酒匂海岸を東へ流れる汐流の力によって起こるものである事は明白である。

さて、この水際の地形湾曲を意味していると言う勾の字を用いた地名が酒匂の他に意外に手近な所にある。

それは、小田原市と二宮町の境を流れる中村川に沿った二宮町の一地区「川勾」である。この中村川と言ふのは第一生命の裏山あたりから流れ出しており、室町時代頃迄は、今のように直線的に海に流れこんではいなかったと考えられている。中流部は、小さな湖となっていて、海岸へ四百米程のところまで西へ曲り、まえば前羽村(小田原市)の中央部迄流れ海に入っていた。それが今から五百年程前の大地震で川尻を塞いでいた台地(今の押切)が崩れ、湖の水が一気に流れ出して海に直流し、現在のような地形になったという。この地震前の川の曲りから二宮側の地域は川勾と呼ばれていたという訳である。これは確かに風土記の説と一致

しているが、この中村川の曲りの大きさに比較して、酒匂川の川尻の曲りは、せいぜい十米か二十米程度の余りにも小さな自然現象であって、これが果して地名の起こりとなり得たであろうか疑問と言わざるを得ない。

又これ迄の風土記の記述の中でどうしても納得のいかなかったのは、海川の地形湾曲せるを意味していると言ふ勾の字についてのみ強くこだわって酒の字については一顧もしていない事である。ここに酒の字が使われているからにはそれなりの理由があったであろう。勾の一字だけの解釋を以てすべてとするのはいかがなものであろう。ところで本稿の初めに引用した風土記の中の一文をみても、「さかわ」の地名が、いつ頃から使われているかについては特に觸れていないが、酒匂村の項全体の記述を見て行くと、次のような事も次第にはつきりとわかってくる。「箱根権現文書」の中の鳥羽大上皇酒輪郷四十八丁寄進云々の記録(二吾頃)によって、今より八百年も以前から酒匂の地名が存在した事がこ

れでわかる。又少し年代は下るが、東鑑の中にも酒匂の名が数多く出てくる。建久三年(二二六)八月鎌倉将軍源頼朝は夫人政子の安産祈願を相模國の二十ヶ所の神社佛寺に命じている。この時の社寺の中に柳下加茂(鴨ノ宮加茂神社)、福田寺

酒匂の名が見えている(福田寺とは今の南蔵寺の前身)。このように平安末期既に酒匂・酒輪の名の存在した事を明確に示している。これ迄は風土記の中から地名の起源を求めてたが、いずれをとっても満足できる結論とは言い難いものばかりである。そこで風土記の記述から離れて、違った視点から考えるのも無駄な事ではないであろう。

二 酒匂氏と上鞞寺との関わりについて

酒匂の地名の起こりを考える時どうしても見落とす事のできないのは、最近になって正倉院文書の中に発見された平安初期の人物酒波人麻呂の存在である。この人物について知られている事は、相模國の國司正六位上行椽勲十二等と言う肩書だけで、その他の事は一

切不明のようである。相模國の國司であったこの人の酒波の姓は、「さかなみ」ではなく「さかわ」であろうとされているところから、この地の出身者ではないかとの説もある。或いはそうではなく、大和朝廷から派遣された官人であったかも知れない。この人物がここに真実國司として居を構えていたとしたらその当時は戸数も少く地名も確かなものはなかったかも知れない。

このような未開の集落に突然に強権を持った国司の出現に住民は戸惑った事であろう。この大きな力を持った國司の姓の酒波(さかわ)が自然発生的に地名となっていたのではないだろうか。永い年代を経た今はこれらの事についての伝承も何もないが、次の宿駅に国府の港(津)であったと言う国府津の地名が残り、近郷に上府中、下府中等の地名もある。相模國の国府については諸説のある中でこの酒匂周辺にも国府が存在した一時期のあった事を立證しているのではなからうか。以上のような事を考えていた平成五年八月末、突然わが家に未知の人の訪れに

よって、自分の中に芽ばえていた人麻呂酒勾居住説の真実性が急に浮かびあがって来た。その突然の訪問者とは、筆者が酒勾に住んで未だ耳にした事のなかった酒勾の二字を姓としていた事であった。東京都国分寺在住のその人の話によれば、どうやら祖父の幼かった頃迄、この酒勾に住み、広い宅地や農地を持って、豊かに生活をしていらしいと言う。なお、今回の酒勾訪問は、数代前の先祖の墓石がこの酒勾のどこかにあったと言う事をきいて墓捜しの為のものであった。その墓石については、何の手掛かりも得られず、帰途酒勾支所で明治末年の戸籍簿の中に酒勾氏の名の有った事を確認して帰られた。

この支所での戸籍の話を書いた筆者は、何か半信半疑で数日後支所を訪れてみて、それが真実であった事にこれこそ酒勾の歴史であるとひそかに興奮を禁じ得なかった。

ところでこの平成の酒勾氏と平安時代の酒波氏とを結びつけようと考えても、余り年代の開きが大きく夢のような感じもするが、こ

の二者の間にもう一人の酒勾氏が実在したとしたならば、一概に夢と言って斥ける訳にはいかないであろう。その第三の酒勾氏とは、何時代のどのような人物であったのだろうか、ここで再び風土記をひもといてみると、酒勾村上輩寺の項に次のように記されている。

上輩寺 九品山浄土院と号す。時宗。 國府津村 運台寺末 開山他阿真教。永仁五年(二元七元)元年正月二十七日卒。

この両寺も村内に起立す。下輩寺は今廃し本尊薬師は寺守法寺。村東神明社跡の陸田に薬師符と言ふ字あり之をの開基酒勾右馬之頭某なり。その牌を置く。牌面に刻して云ふ当寺の開基大福瓶。酒勾右馬頭佛阿弥尊に維正安元年(三三)七月七日往生とあり、木理の棟全く當時の物なり。長さ一尺一寸六分幅二寸五分又墳あり。 五輪三基並ひ 建高五尺四寸

当時この地に第三の酒勾氏が実在した事がこれによって明らかである、とは言えずこの記述だけでは、右馬之頭の全体像を知る事は出来ない、分かる事は、この時代は、鎌倉佛教の興隆期、日蓮、法然、一遍、親鸞、道元、等名僧が多く現われ、それ迄宮廷公卿の専有物であった佛教を武士階級農民の生活の中に迄浸透させて

行った頃である。こうした時代に生きたこの右馬之頭も、佛の教えを深く信仰していた人物であったという事と、右馬之頭と稱した事からして酒勾地域一帯の支配者であったであろうという事ぐらいである。記述にある当寺境内の高五尺四寸(一、七米)の堂々たる三基の五輪塔はおそらくこの酒勾氏一族に関係したものであろうと思われるがはっきりした事はわからない。

このような大型五輪塔は別にして当時の酒勾集落跡のあちこちに今も小型(高六十糎)の五輪塔宝篋印塔のくずれたものが塔にして九十基分も散在している。これらの塔に祀られていた人々は、いづれもこの地の土着であって、単なる農民ではなく、おそらく支配者であった酒勾氏と主従関係を持って「いざ鎌倉」と言ふ時は、武器を取って立つと言った農耕武士達であったように思えてならない。

そうだとしたらこの酒勾氏は、かなりの武力を持った豪族であったのではなからうか。この地方で稀にみる三基の五輪塔は、当時の酒勾氏の実力を今に伝え酒勾

町に於ける最古の石造文化財となっている。又、今回酒勾支所の記録から知り得た事は、明治末年の酒勾氏の住居は意外にも右馬之頭が開基とされているこの上輩寺の隣接地であった事である。この事から考えてみると、明治の酒勾氏は、六百年前の先祖右馬之頭を守り続けてきたその末裔であった事に間違いのないであろう。又酒勾氏については、箱根権現文書の鳥羽太上皇酒輪郷四十八丁寄進云々によって、この右馬之頭より百五十年も以前既に酒輪の地名が存在した事が知られている。

これより更に遡って酒勾の地名と酒勾姓の起こりについて考えてゆくと、この地に何らかの理由から「さかわ」と言ふ地名が発生し、やがて酒勾姓を名のる人が出てきたのか、或いはその反対に人麻呂のような有力者の出現によって、酒波姓をそのまま地名としたものであったか考えると後者であった可能性の方が大きいのではなからうか。いづれにしてもこれら一連の酒勾氏は、この地に平安の昔から明治の世に至る迄酒勾の

歴史と共に連綿と生き続けてきたのであろう。このように千年以上にも遡る地名の起こりを解明しようとしても、容易な事でないのは当然である。

三 勾と句について

鎌倉時代から使われてきた勾の字に代ってどうしてか江戸後期あたりから次第に句の字が紛れこんできたようで、明治になると村役場でも句の字が使われるようになって了った。どうしてこのような奇妙な事になったのだろうかと考え抜いた末、ゆきついたのはまこと他愛もないもののように思えてくるのであった。それは勾と句の字の形がよく似ていた事と句の字が勾の字に較べて、酒の字との相性がよかったとでも言うのか、何となく無意識に書いていたくなるような気のする酒と句の二字である酒の字が発散したアルコールに酔ったと言う訳でもないであろうが、いつの間にか酒勾が酒勾になって了ったと言うのが真相ではなかつたらうか。(了)

筆者住所 小田原市酒勾 二一三八一五六

## 孝行者藤右衛門尚清

(5)

## 石綿 勉

## 六 忠孝道徳奨励策

幕府や藩は、忠孝奨励に熱心であった。御触書に、高札に、五人組帳前書に、忠孝の教えを掲げて周知徹底をはかった。為政者が変わっても、くり返し教えを掲げて教化し続けた。幕府の一貫した、不変の忠孝道徳奨励であった。

藤右衛門の孝行褒賞・孝義録登載も、この忠孝道徳奨励の延長線上の現象として扱いたい。この振興が背景にあるだろうと仮定し、これを実現した模範者として、藤右衛門が抜擢され、活用されたものと考ええる。幕府の忠孝道徳奨励策を通して、当時の社会的背景や為政者の思いに近づき、孝の社会性を吟味したい。

## ○触書

孝行の教えを含んだ最初の触書は、三代將軍家光が慶安二年(一六四九)に発したいわゆる「慶安御触書」で

あるという。

この中で、孝の要点は親の心を安めることにあるとして、健康第一、大酒やけんかを戒め、兄弟仲よく……と、わかり易く孝を説いている。

触書は、今でいう法令である。いわば強制力を背景にした孝行の奨励である。孝行は、自主的行為が自然態で、爽やかさがある。

為政者は、この自主性を育てて家庭内秩序を図り、これを天下の秩序の安泰に運用していく、統治策の一環のように思える。農民統治の根本方針を示した「慶安御触書」の中の孝行奨励が、この願いを伝えているように思える。

## ○高札

幕府は、高札にも忠孝の教えを盛りこんで、全国津々浦々に、この精神風土の形成を期している。

その一に、五代將軍綱吉が、天和二年(一六六二)に掲

げた高札がある。

第一条に「忠孝をはげまし、夫婦兄弟諸親類にむつましく……」に掲げて、熱意を伝えている。武士に必要だった「忠」を、庶民にまで強く要求したという特色がみられ、忠孝精神発揚の高札であった。

しかもこの一条の文末に「不忠不孝者は重罪として処罰する」旨を伝えて、厳しい忠孝道徳奨励である。為政者側から見ると、不忠不孝の行為は、当時の身分秩序が混乱する不安があった。

当時の社会は、士農工商の別を基礎とする身分社会であった。私的な人間関係でも、地主と小作人、親方と徒弟など、上下秩序の厳守の社会であった。家族関係でも例外ではなかった。不忠不孝の行為は、この身分社会の崩壊につながる危険性を含んでいたので、厳しく処罰する政策をとったという。

この時、藤右衛門の母は六歳の少女だった。

その二の高札に、六代將軍家宣が、正徳元年(一七一一)に掲げた高札がある。これも第一条に「親子兄

弟夫婦を始、諸親類にしたしく……主人ある輩は、各其奉公に精を出すへき事」と、人間として行うべき道徳を説いている。

はじめに「親子」すなわち孝をとりあげ、主人持ちの奉公出精すなわち忠を説いている。つまり、孝が忠に優先している。天和二年の高札「忠孝」とは、序列が逆転して教えている。

これは、為政者側が庶民の生活実態を洞察した所産であるという。つまり、庶民のもっとも密接な人間関係は主従関係ではなく、家族関係だったというのである。したがって、各家の生活が、孝によって秩序を保っておれば、社会秩序の安定確保につながるとみたくいう為政者観が知らされている。

この高札が掲げられた正徳元年は、藤右衛門九歳時の少年だった。「京紺屋後継者」の彼は、これに必要な能力を習得する修業の最中が想像される。

小田原府内の高札場は、当時の宮前町(松原神社前)現在の国道本町交差点付近にあったといわれている。この地に、この高札も掲示

されて、忠孝精神を意識づけていた。藤右衛門は、その後の人生を含めて、この高札の見聞が考えられる。

## ○五人組帳前書

幕府は、五人組帳前書にも忠孝奨励を導入させて、下部組織への浸透を図った。小田原藩内では、中里村(小田原市)の五人組帳前書享保十七年(一七三三)が知られている。

この中に「父母に孝行、夫婦、兄弟、親類とむつましく……」とあって、高札と同じ内容を説諭している。末尾に「毎年正月、五月、九月、一ケ年三度、村中大小百姓」に読み聞かせるよう命じている。

享保十七年は、藤右衛門三十歳の働き盛りであった。(翌年父親七代尚康死)、翌々年長男九代尚喜誕生)

藤右衛門の住む板橋村でも、中里村と同じような五人組帳前書があったはずである。藤右衛門は、京紺屋八代戸主として「一ケ年三度」の読み聞かせを、毎年経験したのである。その度に孝行の思い、特に未亡人となった母への孝行を募らせたと考えられる。



○小田原藩の御条目

小田原藩の御条目の中にも、孝行奨励がみえる。藩主大久保忠興時代の宝暦十年(一七三〇)の御条目の中に「親子兄弟夫婦むつまじく家内をおさめ……」と諭している。

やはり、正徳の高札にそつた孝行奨励をみせて、孝行を啓蒙している。

小田原藩は、幕府の老中職(忠興の祖父忠増・曾祖父忠朝)を輩出している幕藩関係にある。幕府の孝行奨励を藩政に忠実に反映させて、具現化に導き、忠誠を尽くした藩の姿勢がうかがえる。

宝暦十年は、藤右衛門五十八歳時で、母が亡くなる一年前である。したがって母親への孝養真最中の藤右衛門であった。

○刊行物

幕府は、刊行物の面からも、積極的に孝行奨励を啓蒙した。

前述したように、八代将軍吉宗が熱意を示した『六諭衍義大意』と、十一代将軍家齊時代の老中・松平定信が肝いりした『孝義録』

がそれである。

ともに全国に市販させて、孝の精神風土形成に役立たせた。庶民の徳育資料という役割をもたせて、寺子屋などで使われ、孝を啓蒙啓蒙してきたのである。

刊行物の永続的に使えて、内容の再確認・自学自習・不特定多数の利用等の特性を、徳性教化に活用した為政者であった。

○褒賞

幕府は、忠孝道徳に顕著な篤行を重ねた実践者は、褒美を与えて賞揚した。褒美はコメ・金の下賜が最多で、年貢免除や苗字御免もあった。

授賞者は、当面の生活援助に恩恵をもたらしたという。褒賞は、周囲の人も包含して、道義心昂揚を励まし、意識向上に役立っていた。

藤右衛門の褒美をみると、藩主表彰時は年貢生涯免除であった。七十歳時の表彰九十一歳時死去なので、約二十年間の年貢免除であった。孝義録発行の際も、幕府から褒美を受けているが、何であったのか不明である。

為政者は、なぜ「孝」に

こだわり重視して、熱心に奨励し続けたのか。この課題にあえて挑戦してみた。

まず、幕府の信奉した儒教の影響が考えられる。当時の幕府は、特に朱子学を重んじた。朱子学者は為政者側に、民を治める道を説いて、幕藩政治に必要な理論的根拠や知恵を提供したという。

儒教では、徳をもって民衆を教化することが政治の術であるという。いわゆる徳をもって民を治めるという「徳治」の思想である。この中に、孝によって天下を治めるという思想があった。したがって当時の為政者は、民衆を教化することが政治の重要な施策と考えていたというのである。

法をもって国民を治める「法治」中心の社会よりも、はるかに教化的であったという時代背景の中に、孝行奨励があった。

「孝によって天下を治める」という儒教の思想は、為政者にとって魅力的な政治手法であったのかもしれない。孝による親への恭順・服従・奉仕の心は、おのずから君主への恭順・服従・

奉仕となって具現するといふのである。つまり「孝」の親を君主に移せば「忠」となる、忠孝一体の思想である。

この時代の「忠は」、直接に仕える主人を対象にしたという。すなわち、幕臣の場合は將軍、藩士は藩主、庶民は所屬の長に対する忠勤を指していたのである。この忠孝道徳は、為政者にとって、幕藩体制の維持

発展に絶好の思想だった。教化によって、為政者に忠実となり、服従・奉仕する民衆になるといえば、食指を動かすのは当然であろう。

孝は元來、親子という家庭内の道徳である。それが、国を治める政治的運用によって、社会秩序の道徳として位置づけられ、国家道徳にまで拡大され運用されたのである。

(続)

早川の集落 (95.11.10 撮影 向山にて)



# 紅蓮洞・坂本易徳

(24)

## 岡部 忠 夫

『極東会報告誌』(以下単に「報告誌」)が刊行された明治二十二年(一八九七)というと日本が経験した最初の好景気で、資本主義企業勃興の高潮期に当る。いかなれば産業革命が緒についた、ということである。それは、明治十九年、政府紙幣を金貨に引き換える正貨兌換制度が実施されたところから始まった。

好景気の中心業種は、紡績と鉄道である。紡績業については、その発展は目覚ましく、明治二十年から二十三年にかけて、新設された紡績会社は十数社に及んだ。そして、明治十年代前後に盛んに行われたガラ紡と呼ばれた水車紡績による和糸紡を僅々数年間のうちに圧倒してしまった。

しかし、小田原ではこの時期、紡績業の好況とは直接関わり合いはなかった。地域の発展にじかに繋がりを持ったのは、鉄道の敷設

である。

明治二十年(一八九七)七月十一日、東海道線横浜―国府津間が開通。それに伴い国府津蒸気機関区も設置された。

ともかく、新橋より国府津まで直通の鉄道が、地域に及ぼす波及効果は大きかった。

国府津駅(当時、駅は停車場と呼ぶ)前には、待合茶屋、貨物取扱所、案内所、汽船会社、旅館など目白押しで、駐在所も設けられ、次第に商店街が形成される盛況ぶりだった。

旅館を営む山口仙之助(箱根宮之下)、福住九蔵(箱根湯本)、片岡永左衛門(小田原旧本陣)の三名は、国府津駅前共同案内所を設けた。来客には人力車・馬車などの手配をもしたのであろうか。

貨物取扱所は、東京内国通運会社小田原分社小西国府津派出處と長たらしい名称だった。小西とは、運

送を請負っている小田原の小西治郎左衛門の出店の意味であつたらうか?

汽船会社は、伊豆までの陸路は、山坂が険しく、旅客は熱海温泉までの往復がままならないのに、地元の蓑島清吉が着目して、蒸気船による就船をこの年の十月二十七日に開始した。名づけて豆相汽船会社。外輪の汽船が用いられたと思われるが、貨物輸送も従来の押送船に較べスピードも早く、積載量も多くなる。便

は、午後一時三十分国府津発、小田原、真鶴、吉浜に立ち寄り、熱海に五時着。料金は五十銭、網代までは六十銭であった。小田原の扱所は、青物町の片野屋大南源太郎が引き受けている。

小田原では、二十年十一月、国府津より小田原を経て湯本に至る小田原馬車鉄道の敷設が目論まれた。発起人は、吉田義方、今井徳左衛門、二見初右衛門、福住九蔵、寺西台助、益田勤左衛門、杉本近義であった。

翌二十一年(一八九八)二月二十一日、鉄道敷設の認可が下り、小田原新玉三丁目四百四十番地に創立事務所が設けられ、七月には本社

を小田原幸一丁目二一四番地に置くことになった。松原神社の西隣り、今の国道一号に面した場所である。

ところで、「報告誌」第四号雑報に、地ビール製造の記事がある。

富士ビール 大窪村板橋(小田原市板橋)内野氏ビール醸造を営む数年。販路未だ甚だ広からずと雖ども、豊味の評あるを以て、其盛名を博する蓋し速きにあらざるべし。

『報告誌』第四号が発行されたのは、明治二十三年(一九〇〇)一月。一方、「横浜毎日新聞」明治二十一年(一八九八)一月二十日の記事には、小田原麦酒醸造所の内野幸七が醸清社を設立、富士ビールを発売する予定とある。富士ビールが発売されたのは、わが国初の経済成長期に伴う、企業熱の盛り上がった、明治二十一年頃と考えられる。

同二十一年九月二日には、小田原御幸の浜に有志の出資による旅館鷗盟館が開業した。国府津迄の鉄道の開通と、馬車鉄道の開設を踏まえ、京浜地区からの来遊客の増加を見越しての施設

であった。

であった。

小田原馬車鉄道株式会社創立総会は九月二十三日に開かれた。資本金は六萬五千元。次の役員が選出された。

社長 吉田義方

副社長 杉本近義

取締役 茂木惣兵衛、田

口卯吉、伴直之助、二

見初右衛門、福住九蔵

長谷川豊吉、向笠彦右

衛門

検査役 柏木正敬、二見

正三

開業の運びになったのは二十一年十月一日であった。

一方、この十月の中頃、飯沼ヒデ(東華軒の創業者)は、竹の皮に包んだ握りめに香の物と梅干しを添えた弁当(一包七銭)を国府津駅構内で売り始めている。明治二十二年(一九〇九)一月一日になると、鉄道網の展開と共に、歩調を合わせるように、通信手段の発達が見られる。

国府津駅で、わが国最初の公衆電報が取り扱われたことだ。この業務は、その後、昭和六十年七月まで続いている。

また、同じ日に、名士たちが静養にやって来る熱海

の浴場嚙汽館と、東京の中央電信局との間に一回線が架設され、公衆電話の試行が開始されている。

同年一月には、『中外物価新報』(明治九年二月廿二日創刊)が『内外商業新報』に改題された。因みに、この新聞を創業したのは、晩年小田原板橋の別荘掃雲台に住んだ三井物産初代社長の益田孝である。

編集方針を、商品の相場からその流通面へと視点を広げたのは、先に記したように紡績業を中心とした近代的諸産業の発展と鉄道網敷設の進展に伴う、日本で始めて経験する好景気の時期に当る。日本経済の変革を意識しての事であろう。

年代を戻す。  
明治二十一年(一八八六)四月末、憲法案審議の機関として枢密院が設けられると、伊藤博文は、初代総理大臣の職を降り、枢密院議長に転じた。

ところが、博文は、その年の十月、枢密院議長を辞めている。そして、小田原の御幸の浜に構えた和洋風の別荘滄浪閣に入って悠々自適の生活に入った。結果的には憲法制定への目処が

立っての骨休みとなった。見方によっては、彼にとっては、次に登場する迄の束の間の休養でもあったと云える。そして、暮には父伊藤重蔵のために、小田原町緑一丁目八番地に屋敷を建てている。今の松琴楼、音羽、中村屋などの前に当る。博文によって建てられた二つの邸宅は、小田原が別荘地、保養地として適地であると折紙をつけたものといえる。これも、鉄道網の敷設により交通が便となった結果である。

ところで『報告誌』第一号は、小田原馬車鉄道について、次のように報じている。国府津より小田原を経て湯本に至る、二條の鐵路、馬肥へ車滑なり。清潔の車に駕し、軽便の旅を為すを得るを慶す。余は会社の萬歳を祈る。

極めて明るい、将来に希望を持った内容であるが、その実、沿道住民にとっては、馬や馬屋に群がる蠅や馬糞に悩まされている。それを、編集委員たちは、在京学生で、その辺の事情を何も知らなかったと言えはそれ迄だが……。

編集委員は、坂本易徳、廣仲通次、熊本政共、相澤親之助、目良恒の五名。そのうち坂本易徳は、発行兼編集の元締として、この記事を記したとも考えられるが、あるいは、他の編集委員が書いたとしても、みな、幕末から維新にかけて生まれ、夢を将来にかけた二十歳前半の青年である。馬車鉄道の明るい面を見つめたのは当然かもしれない。

五人の編集委員のうち、相澤親之助を除くと、旧小田原藩の下級藩士の子弟である。その父や叔父たちは、維新の戊辰戦争で一時政府軍に背いて苦しい思いをしている。さまざまな社会変革が行われている新しい時代に即するには、子弟たちに高等教育を受けさせ、彼等に望みをかけるより他にはなかった。

相澤親之助の身元については、その弟と思われるのに、相澤鉄之助がいる。一応兄弟として捉えたい。その出身ははっきりしないが、南足柄の出身ではないかと思われる節がある。それにしても、兄弟二人を東京で教育を受けさせるには、相当の財産家で、それに時代

の先を見つめた親でないといえない事である。ともかく、『報告誌』の編集委員の面々は、学生として修業中であるが、一応、当時数少ない知識階級に属する。

ついでには、『極東会報告誌』に彼等が記した論説の題名を挙げてみよう。

まず坂本易徳から。

「七ヲ以テ整除ス可キ数ノ性質ニ就テ」(明三二一〇)

「衛生心理学」(明三二二〇)

「経済学ノ起源及ビ進歩」(下山恪三と合訳 明三三一)

「平賀源内の事蹟」(明三七四)

「算術教育論」(明三三〇)

坂本が目指した分野は、雑然としてはっきりしない。同じ編集委員目良恒や広仲通次と較べると、明らかに違うことが分るが、これはまず措いて、坂本と合訳した下山恪三について觸れよう。下山については、前にちょっと記したことがあるが、酒田村金井島(開成町)の出身である。家は、江戸時代は、質屋や酒造りを営んだことのある身代豊かな素封

家であった。彼は、坂本易徳と一緒に、京橋区木挽町一丁目十一番地の志村方に下宿同室し、共に三田の慶応義塾正科(のちの予科)に通学した。

ついでに記すと、合訳の内容は、太平洋戦争後も依然として学生の間で重きが置かれた舞出長五郎著『理論経済学概要』の始めに載る部分と、基本的には差がない。もっとも、その頃イギリスの経済学者J・M・ケインズの理論が、マルクス経済学を克服するものとして、新鋭の教授によって説かれもしたが……。

下山は、また、『鉄道敷設ノ地方人民ニ及ボス影響』(報告誌 明三二一〇)を発表し、鉄道の敷設は、各地方の人民の福利を増し、商業的な考えを喚び起すものであると結論づけている。坂本と下山は、明治二十二年(一八八九)十二月、慶応義塾正科を修了すると、坂本は義塾の文学部に進んだ。下山は郷里の酒田村に帰ったが、再び上京して農科大学乙科(東京大学農学部の前身)を二十六年に卒業。その後、神奈川県農業会役員に就いている。(続)

## 露国・日露の役俘虜のこと(八)

## 八十七年ぶりのお礼 後編

文と絵

隠岐威重

夏の雨が強い日だった。それでも夕方には上った。まだ雫が柑子の葉を伝わって落ちていた。そんな時、例の老女が老人の家を尋ねて来た。きちんと和服に整えて老人が望んでいた小冊子を届けに来た。

前に記した春祭りの残りの席で、場違いの七、八

十年前の日露の役の礼を受けた話。彼女の祖父が戦場で傷つき捕われた時、老人の祖父が僅かにその情報入手の手伝いをしたことに對して、突然のことで、驚愕し、動転してしまっただけ、少し時がたつとその資料を見たい願いが頭をもたげ、頭と胃袋を強く刺激し資料の入手を促した。そして厚かましく老女に電話し資料の閲覧を願った。

老女は快諾して呉れた。

「でも只今、ワープロが故障して、うまく紙が出ませんの、修理を頼んでおりますから直り次第お届けし

ます」の返事が帰って来た。ワープロ、六十を越した老女がワープロを叩く、しかも素人で。中々モダンな態度と変に感じ入り、入手の許しを得た事で満足した。「紙が巻き付いただけなのですぐに直りました」と、三十枚ばかりの小さな冊子を恥かしそうに差し出した。

祖父の戦地からの手紙と、内地の者達からの便りを並べてみました。出来るだけ日時と戦争の流れを合わせて作ってみましたがお恥ずかしい出来です。でも、是非お読みください……。それに、これ、お祖父様(老人の)が戦地から小田原のお祖母様にお送りになったお手紙、私の祖父のことをお調べになったものでございます。それをお祖母様が山角町の私の店にわざわざ

届けて下さったものです。家では宝にしております。それも是非御覧下さい。

老女は大判の茶色の封筒を老人に手渡し、にこっと笑って、雨上りの道を小さな下駄の音をたてて、涼しげに去って行った。

その小冊子の表紙には、日露戦役従軍記録書属往來・内田善作(老女の祖父)と、封筒の角に、吉田雪子(老女の名)とあった。それと、隠岐重節閣下の御筆跡と別の小封筒に入れた手紙が添えてあった。小封筒の面は立派な字だが中の手紙は誠に貧しい黄化した薄紙に見える。覚えのある祖父(老人の)の筆跡があった。

この黄化した貧しい手紙が八十七年前のお礼の素、本体である。それにもう一つ、もっと貧弱な明治の葉書が一葉あった。善作氏の生死不明の中、老人の祖父の手紙が内田家に届けられた。その時善作氏の父重兵衛さんは東京の親戚へ行って不在。その満洲からの便りの内容を日本橋の回漕問屋(重兵衛氏の訪問先)に急ぎ知らせたものだ。現在の

葉書よりずっと小型の一銭五厘の黄ばんだ葉書、その上に家族の不安と期待が溢れていた。この時点では未だ善作氏は行方不明。

さて、内田家について。旧内田家(屋号おきな屋)の隣で郷土史に詳しい井上氏から聞きかじったもので必ずしも正確ではないが。

内田家は旧小田原町で洋品物を扱う大きな商家であった。町方の名家と云った方がいい。まだ町に議會制が出来る前、それに代わるものとして町内(十字町)の代表として内田家の当主が町政に参画していたとか。農村の庄屋に似たものなのだろう。

書簡の往來の小田原から発便には当時の町の、近在部落の店の名が記されている。老人もその半ばは知っている。前記の日本橋の回漕問屋も親戚の由。その交際の範囲も田舎の小田原地方だけでなく、東京にまで広がっていたようだ。

大正十二年(一九二三)の大震災のあと、老人も物心ついて、小学校に上がった。少しは当時のことも憶えている。震災の直ぐ後、内田家(おきな屋)は立派なお

店を新築した。現在もその店が残っている。喫茶店に変わっているが、建物は変わらず、大正風の好ましい姿でいる。

当時の山角町は小田原の西端の商店街だった。箱根の湯本に行く町内電車が通り、地震前は伊豆の熱海まで行く軽便鉄道の終点駅だった。箱根から、伊豆の熱海から、湯河原、近くは江の浦、米神、片浦、早川から客が多く街は賑わっていた。そんな地で、おきな屋は洋品店を営んでいた。いまならさしずめ町のロータリークラブの会員と云うところか。

文中に出る宮の前(宮小路)の大通りに面した角店も、山角町の店に似ていた。なお、重兵衛氏には子がなく善作氏は入り婿のようだ。狩野、現在、南足柄市の富士写真フィルム足柄工場がある地の出のようだ。細かく内田家の家を詮索する気はない。ただ、当時の大店の若旦那が遠く満洲の留守宅が心配している様に、時代の流れを知ることが面白いと思っただけだ。また、善作氏はどんな教育



を受けたか知らぬが、中々の学識の持ち主だ。

戦地からしばしば新聞、紙、封筒、筆を要望する事が多い。軍は月に六回一通の便りを内地に出すことを許していたが、善作氏はそれが待ち遠しいような筆まめの性を示している。また、

欧露・ドイツ・アフリカ・インドの風俗習慣を見る目は鋭く、温かい。当時の庶民の眼の高さが知れる。便りを読めば現代の大学生も中々書けぬ筆力を示している。

捕虜に対して

日本と欧米の差

欧米では捕虜は名誉ある戦士とした。力戦して止むを得ず捕われた者は勇士として扱うようになった。(過去は知らぬ)まして戦場で傷つき倒れ、身の自由を失った者は大勇士として扱

う心境が強い。中には戦場で傷ついた者を殺す狭心の者も居たろう。一時の憎しみの為に。なぶり殺す者も居ただろう。

だが、彼の地の理性は、勇戦するも利あらず、捕われた者を哀れみ、戦いが終れば個人としては勇者とする騎士道のことか。また、西欧の理性は強い。

それを愛、博く愛することを旗印とし、法として定め、万国と協約する姿勢を築くことは、人間を信ずる精神の確立に通ずるように思える。

そして、日露の役はその模範答案のような処置を両国とも行なった。少しは人間を信じてもいいと思つたが、その後僅か三、四十年の第二次大戦、太平洋戦では大後退、落第点の行動をとった。人間の叡知の存在を疑わせるような大悪行をしてしまった。

また、愚痴話になってしまふから止めよう。

では、日本では捕虜につ

いてどんな考えを持っているのだらう。捕虜を生む戦いについてどうだらう。島国のため、国外に出て戦うことは少ない。少なくとも明治新政府が出来る前には、

天皇制が出来る前に僅かな朝鮮半島へ乞われた出兵。秀吉の無意味な出兵以外は聞かぬ。だから戦いは国内が主だ。その戦いを生む原因について考える必要がある。

遊戯、スポーツのために

戦う、そんな生死を伴う乱暴なことをする奴はいない、奴等はいない。食えなくなる恐怖、暮らせなくなるとか、経済に繋がることが戦いを生んだのだ。

生存の基、その争奪、我々の体質の中に深く根ざして、後世にも伝わるものは何かあると思う。それを老人に独断させて頂きたい。

それは、米、米作、農地だと思ふ。それについて触れる。米作が日本の、日本人の心情に深く根を下ろし、体質、思考を形成していくと思うから。

弥生時代のある頃か、北九州辺に渡った米作は瞬く間に日本列島全土に広がったと聞く。米は、農地単位

当たりの収穫量が多く、国の人口を大いに増したとも聞く。

また、こんな話も。まだ採取を生業としていた人達、前任の人達が殆どこの島々を占めていたが、米作を知った後来の者達が、それを追いつ、北方に追い詰めた歴史がある。夷とし、賊と見做して、平げていったと学校では習ったが、識者に聞けばその本質は、米作を習った和人は、米作は誠に結構なものだ。君達(前任者)もこの業を覚えなさい、そして定着しなさい、すれば生活も落ち着く、と。ここ迄はいい、そして税金(年貢)を大和朝廷に納めなさい、と強要した。

これを前任の人達は嫌い、採取の体制を捨てずに北に逃げ去って行ったとも聞く。そんな戦いの歴史を語っているのではない。

米が如何に日本人(和人と固く結び付いているかを云っているのだ。そして田園、農地はそれを開拓した人の物になった。自作農だ。その親方が各地の豪族の首領になり、武家制度が関東に起こった。将門の頃か。その後色々争

乱があり、制度としてやや落ち着きが出来たのが領国大名の発生の頃かと思う。学校の教科書でも、巷の講談本でも、大名は何十万石、その幹部の将は何千石とか聞くと、お殿様はウン十万石を産する土地、農地を所有し、其の他を耕作者の百姓・雇い人に与えていると思ってしまう。

これは鳥眼的に上から見下ろした考えである。下から少なくとも水平から見ると物事を見違える。

大名が土地を所有するという事は大違いなのだ。土地の所有者は農民・百姓なのだ。農民が農地の経営者なのだ。何時の時代も農民は土地・田圃に張りついて居たのだ。

大名、その直属幹部はただ梓として、穫れる米の石高の枠を、其の生産米の量の一部・税金(年貢)の上がりを買っていただけなのだ。主体は農民、土地の所有経営権は農民にあり、それから上がる税金を米の石高に変えてもらうのだ。農民は農地の売買・入質の権利を持っていた。この

制度は、開拓民が荒地を開き、自らが農地にした頃(武士の勃興期)から、領国大名・豊臣・徳川の時代も変わらなかった。

ただ年貢の高低とか、農本経済が行き詰まり、商業資本が興り、新興階級(商人・企業家)が経済を牛耳った江戸時代から少しおかしく変わったが、本質は少しも変わらぬのだ。何故なら徳川幕府が潰れるまで農本経済を基にしていたから。

なんで、農民の、農地の、米の話をしたかと云うと、大名達の戦いは、その枠の争奪であり、勝てばその枠の所有者になるが、農民は変わらぬのだ。農民にしてみれば、税金を納める先、屋号と云ったらいいか、会社名、社長が変わると云うことで、実質は何も変わらないのだ。農民側からその争いを見れば、第三者のことだ。講談なんかで悪代官(出先の管理者)領主を中心に見るから、その方が主役で、農民が従に見えるが実質は逆のようだ。飢饉・一揆・酷税と色々話もあるが、それは話を面白くする上で、それが、実は農村は貧しいが平均的な平和な生活が

出来る場なのだ。

くだいようだが農民は第三者で争いの外に在る。中には戦いに加わり、一儲けを企む者もいるがそれは例外だ。農地を持っている者は、そんな危ないことはない。アウトローに近い貧者がそれをする。秀吉とか、蜂須賀小六とか何もない奴が一発勝負を打って当たった例だ。

こんな意味で農民は、大名領主達の戦いには冷淡だ。農地を荒らす戦いは迷惑だと思っていた。

まして戦いが生む捕虜など自分達には関係ないと思っ

ている。止むを得ず戦いに狩り出されても、風向きが悪くなれば逃げもどり、知らぬ顔で鋤を持ち出し畑を起す。触らぬ神に祟りなしと。いつの時代も農民は、平和を、乱れない世を望んでいた。

明治新政府になった。富国強兵の制度を唱える山県有朋あたりの悪知恵か、欧州(ドイツ)辺から国民皆兵の制度を輸入して人件費の安上がりな兵隊、徴兵制度を作った。永年被害者の立場にあっ

た農民・町人達が武士と同列に並ぶ徴兵の制度が出来たのだ。徳川三百年、いやもっと以前から受け身の立場にいた者達が主役の席に、士族と同列に並んだ。

追う者は強い、西南の役でその力を証明した。薩摩隼人と対等以上に戦った。

この制度は一見成功したように見えた。何故なら、その後の日清・日露の役で平民兵は勇敢に戦った。申し分のない兵士だった。

だが、士農工商と徳川時代だけでも三百年間虐げられた人達が、士と同列になることより、自分達も武士が持っていた考え方、躰、まて同じようになつたと錯覚に陥っていった。それより、昔のことは美化しがちと云った方がいかにも知れぬ。例えば佐賀の葉隠の書でも、それが書かれた時はもう平和な時であった。その平和の時に、武士は如何にあるべきか、理想の武士像を机上で考えて書いたものだ。観念の上で書いたのだ。

その前の時代、戦乱の中での武士とは違う。戦乱の中での武士とはもっと融通無下で、もっと人間臭いも

のだった。良いにつけ、悪きにつけ、もっと荒々しいものだ。

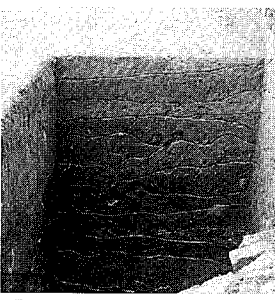
葉隠で表している武士道のようなものを勝手に想像し、新しい兵の道、軍人の道はこんなものだとか創っていった。庶民、大衆もそうだと思っ

明治六年(一八七二) 徴兵令の布告  
同十二年 徴兵令改正 兵役免除 範囲の縮小  
同十五年 軍人勅諭の発行  
そして、極め付けは 「生きて虜囚の辱めを受けず……」  
昭和十六年一月八日「戦陣訓」である。(続)

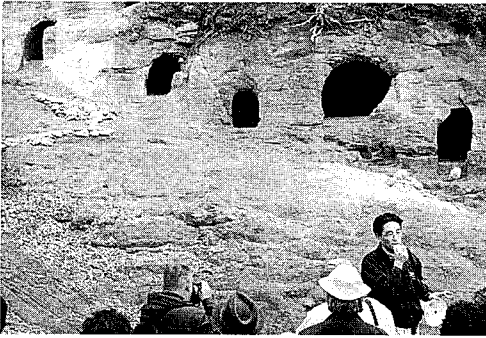
### 羽根尾遺跡 見学会

去る三月二十三日(出)、小田原市教育委員会文化財保護課の主権により、羽根尾工業団地造成予定地で発掘調査された、縄文時代前期遺物と古墳時代の横穴墓群の遺跡見学会が開催された。参加者は一六〇数名。

縄文前期遺跡は、低台地部の地表下1.7〜3mの深さの泥炭層を中心に遺物が出た。横穴墓は、調査の五群三四基のうち、七世紀中葉から八世紀初頭と推定のC横穴墓一四基を中心に説明が行われた。



縄文前期遺物包含の低台地の地層



C群横穴墓の説明

# 街 いろいろ



城内小学校お別れ会  
4月6日

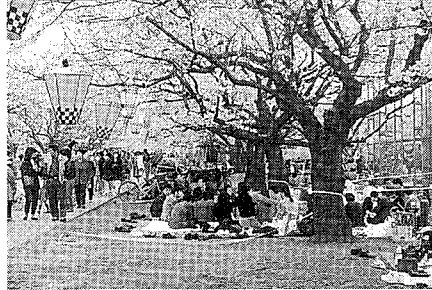
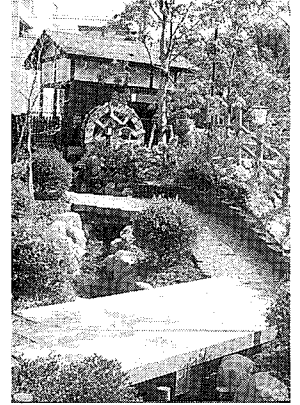
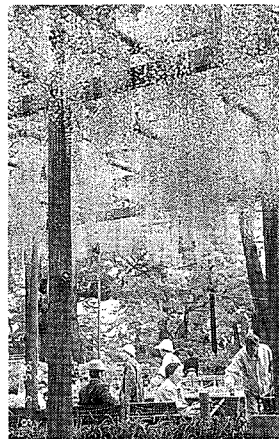


「めだかの学校」  
5月8日オープン



酒匂・大蔵省印刷局にて

生きかえる御感の藤 (小田原城址公園)



北条五代祭りと祭典

小田原  
おいしい発見、海の味  
**かまぼこ祭り**  
4月27日土～28日日

- さきかま大会
- かまぼこ物知りコーナー
- かまぼこ振袖み合戦
- かまぼこ振取り合戦
- 抽選大会
- セーラムーンサイン会

かまぼこ祭り  
(第1回)

若い女子に大人気の  
プリントクラブ  
(ダイヤ街にて)



林角にて

新しい趣向の広告  
(栄町スクランブルにて)

お濠通りにて

新刊紹介

◇小田原藩の研究

著者 内田哲夫

A5 320ページ 定価、500円  
編集・発行

内田哲夫論文集刊行会  
〒2150小田原市城内七-17  
☎0465411055

小田原市立図書館内

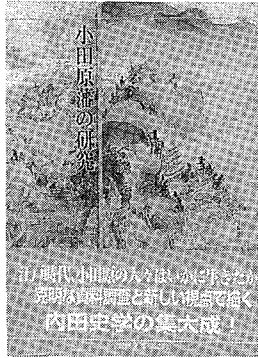
制作・発売 夢工房

〒21575藤野市東田原80-1 兜  
☎0463307653

販売 小田原市内書店

著者 (五言) 26年・59歳)

は、昭和30年3月、早稲田



大学文学部史学科を卒業後  
神奈川県立高等学校で教鞭  
をとりながら、郷土の歴史  
研究を続け、新しい視点か  
らの、主として江戸時代、  
小田原藩領の歴史を掘り起  
して来た。

この書の編集責任者は、  
著者と大学史学科が同期の  
箱根町湯本正眼寺住職の岩  
崎宗純氏。

内容を次の6章に分ける。  
第1章 小田原藩における  
近世初期の検地と農民  
・相模国小田原領の変遷と  
初期検地について・相模国  
柳川村の検地帳について・

小田原領における近世初期  
の検地と農民  
第2章 近世前期にお  
ける小田原藩の諸様相  
・慶安事件と小田原藩一編  
葉日記を中心にして・「村  
鑑」に見る御厨のむらむら  
江戸時代前期の領主・農民・

小田原領の新田村「ころび  
キリシタン奥住新左衛門と  
龜新田の成立  
第3章 近世後期における  
小田原藩の諸様相  
・近世後期における小田原  
藩の諸相・秦野地方に見る  
関東取締出役と寄場組合村・  
報徳仕法と御殿場村

第4章 直訴・一揆・村方  
紛争  
・稲葉藩政と下田隼人の直  
訴一六、七世紀小田原地  
方の開発とも関連して・安  
永・天明期の小田原藩と御  
厨一揆・近世における秦野  
地方の村方紛争

第5章 城下町・宿場町と  
しての小田原  
・近世における城下町小田  
原の上層町人の動向・城下  
町・宿場町小田原の盛衰

第6章 小田原領下の漁業  
・相模湾西部の漁村と漁業  
小田原領を中心に

小田原史談会総会

小田原史談会総会は、平  
成八年四月二十日(土)、十三  
時より小田原市立図書館に  
おいて開催。平成七年度事  
業報告、同決算報告、監査  
報告が行われ、承認、次に  
同八年度事業計画、収支予

算が承認された。続いて役  
員改選が行われ、富田千春  
氏が会長を再任、副会長の  
欠員に石井艶子氏が選ばれた。  
引き続き、文学博士宇  
佐美ミサ子氏により「街道  
の宿場の飯盛り女」と題し

た講演が行われた。なお、  
講演は小田原ユネスコと共  
催の形がとられた。  
事業報告、決算報告、事  
業計画、収支予算次の通り。  
平成七年度事業報告  
◇平成七年四月二十二日(土)  
総会、講演「近代文学と  
小田原」小田原文学館館  
長 三津木 国輝氏

◇三島にも戦争があった2

B5 66ページ  
発行 三島市平和委員会  
編集責任者 土屋 寿山  
連絡先 〒413三島市文教町  
一丁目二二一  
☎0557161109

◇伊豆史談

1125号 '96・3  
A5 73ページ  
発行 伊豆史談会  
〒413三島市広小路町八八  
土屋 寿山方  
豆州戸田村の石材切出し(一)  
高木 浅雄  
天保十三年(推定)  
三島宿町並図 土屋 寿山  
伊豆の幕末台場  
土屋比郡司

郷土誌紹介

- IV 建物強制疎開(取り壊し)
- V 錦田陣地構築について
- VI 農耕馬出征
- VII 帰ってきた「幸運の鐘」
- VIII 戦争と市民生活
- IX 三島野戦重砲兵連隊
- X 憲兵隊
- XI 三島の戦没者

史料紹介

- 明治五年の沼津城内建物入札について 関 守敏
- 沼津における活版印刷の嚆矢 関 守敏
- 史籍紹介 耳囊(みみぶくろ) 問宿(とくしゆく) 中山道宿場めぐり(高崎から奈良井) 小林 弘邦

計報

- 青木信康氏 (小田原市板橋三)
- 去る三月二十四日逝去されました。享年六十二歳
- 平岡幸雄氏 (小田原市早川)
- 去る四月三十日逝去されました。享年九十六歳

計報

- 曾我傘焼祭(役員出席)
- ◇五月二十八日(日)
- 参加者多数
- 史跡めぐり 曾我の里
- ◇五月二十日(土)
- 北村透谷百年祭(役員出席)
- ◇五月十四日(日)

「冥福をお祈りします。」



平成8年度収支予算書(一般会計) 収入の部

区分	予算額(円)
前年度繰越金	194,837
会費	1,200,000
市補助金	24,000
預り金	33,000
雑収入	163
合計	1,452,000

支出の部

項目	予算額(円)
総会費	20,000
会議費	70,000
会員連絡費	130,000
交際費	70,000
事務用品費	10,000
振込手数料	10,000
名簿印刷費	60,000
名宛ラベル	50,000
調査費	70,000
講演会費	50,000
会報印刷発送費	700,000
積立金	100,000
座談会費	20,000
予備費	92,000
合計	1,452,000

財産

積立金 1,003,738円

(内) 定期預金さがみ信用金庫 466,113円 6年4月21日預金  
 " 417,625円 7年8月9日預金  
 " 100,000円 7年10月27日預金  
 (記) 定期預金 本町郵便局 20,000円 8年1月18日預金

平成8年度編集委員会予算書

区分	収入額(円)	支出額(円)
前年度より繰越	9,717	
本会計より繰入	700,000	
特別賛助会費	790,000	
雑収入	1,283	
会報印刷費		1,318,400
会報発送費		90,000
編集費		64,000
取材費		18,600
事務費		10,000
合計	1,501,000	1,501,000

平成7年度 収支決算書(一般会計) 収入の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増△減
前年度繰越金	158,153	158,153	
会費	1,200,000	1,269,000	69,000
市補助金	24,000	24,000	
預り金		33,000	33,000
雑収入	2,847	540	△2,307
合計	1,385,000	1,484,693	99,695

預かり金

兵庫県高砂市 沼田 晃様 12,000円  
 東京国分寺市 中村俊郎様 3,000円  
 山北町 向原 藤井良晃様 6,000円  
 小田原市早川 鈴木貫介様 12,000円

別口会計

7年10月 飯田悟郎様より100,000円頂き  
 さがみ信用金庫本店 定期預金へ  
 西山銚太郎様より20,000円頂き  
 本町郵便局 定期預金へ

支出の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増△減
総会費	30,000	16,012	△13,988
会議費	80,000	64,533	△15,467
会員連絡費	110,000	128,764	18,764
交際費	60,000	98,450	38,450
事務用品費	10,000	6,347	△3,653
振込手数料	5,000	4,150	△850
名簿印刷費	60,000	50,000	△10,000
名宛ラベル	35,000	59,000	24,000
調査費	70,000	22,600	△47,400
講演会費	55,000	40,000	△15,000
会報印刷発送費	700,000	700,000	0
積立金	100,000	100,000	0
座談会費	20,000	0	△20,000
予備費	50,000		△50,000
合計	1,385,000	1,289,856	△95,144

1,484,693円 - 1,289,856円 = 194,837円  
 (総収入) (総支出) (次期繰越金)

平成7年度史跡巡り収支決算書

月日	探訪先	人員	収入額(円)	支出額(円)	差引残高(円)
	曾我の里			3,000	△3,000
11.19	吉見百穴	40	280,000	263,070	16,930
1.21	三浦七福神 初詣めぐり	55	330,000	321,227	8,773
3.31	銀行利子		665		665
合計			610,665	587,297	23,368

330,410円 + 23,368円 = 353,778円  
 (前年度繰越金) (7年度余剰金) (次期繰越金)

六日納骨式(役員出席)◇  
 七月二日(日)  
 西山銚太郎氏(本会役員  
 として永年尽力)葬儀(役  
 員出席)  
 ◇七月十一日(日)  
 北条氏政・氏照墓前祭  
 (役員出席)  
 ◇七月二十三日(日)  
 飯田悟郎氏(本会役員と

して尽力)葬儀(役員出席)◇  
 ◇九月二十六日(火)  
 久野古墳祭(役員出席)  
 ◇十一月十九日(日)  
 史蹟めぐり 埼玉地方  
 (菅谷遺跡・吉見百穴・岩殿  
 観音・吉見観音 40名参加)  
 ◇一月二十一日(日)  
 史蹟めぐり 初詣(三浦七  
 福神めぐり55名参加)

◇二月十七日(土)  
 講演会「小田原宿本陣と  
 参勤交替」中村 静夫氏  
 小田原史談  
 No.165 三月発行 24頁  
 No.164 一月発行 30頁  
 No.163 十一月発行 30頁  
 No.162 十月発行(追悼  
 特集) 8頁  
 No.161 七月発行 36頁  
 No.160 七月発行(追悼  
 予年四回  
 予定)  
 ○史跡めぐり  
 ○市内 日帰・初詣年四回  
 ○講演会 二回総会時を含む  
 ○小田原史談 四回発行  
 ○会員名簿 発行  
 ○役員会 必要に応じ随時開催

(監査)

杉山竹二  
 高橋佐年

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ画廊

熱海 アオキクリニック

足柄香粧株式会社

飛鳥屋

紳士服のアメリカヤ

(株)アルファ

画材 ガクブチ むうえ

伊勢治書店

伊豆箱根トラベル 小田原営業所

かまぼこ

南足柄関本 おぎの整形外科・歯科

税理士 小澤重治事務所  
公認会計士

株式会社 小田原魚市場

小田原ガス

小田原市農業協同組合

小田原報徳自動車

株式会社 オートセンター・スギヤマ

(共)小田原中央青果 株式会社

オリオン座

かまぼこ籠

令学苑

鐘紡株式会社小田原工場

カネボウ化粧品鴨宮工場

神尾食品工業 株式会社

木地挽 日下部産業 株式会社

かみやま小児科クリニック

興電社

小伊勢屋

(有)小松石材店

さがみ信用金庫

趣味のごらく さくらい

宝飾専門店 Shimano

正栄堂

中華料理 昇玉

杉山水道工業 株式会社

鈴木太まぼこ

石寿堂スポーツ

大営不動産

割烹 おるほ

二宮

茶半家具株式会社

ちんぎょう本店

土谷建設株式会社

角田ガクブチ店

東京電力(株)小田原営業所

株式会社 東華軒

トーホー建物 株式会社

鳥かつ樓

和菓子 菜の花店

八小堂 書店

八子マサ店

平井書

富士写真フィルム(株)小田原工場

株式会社 報徳

松坂屋

学生専科 マルク

食器の店 マルサンストア

みつゆき設計

諸星運輸グループ

株式会社 美濃屋吉兵衛商店

みみづく幼稚園

ヤオマサ株式会社

山口菓子舗

株式会社 ユアサコーポレーション 小田原製作所

防災器具 優光社

平成7年度編集委員会収支決算書

区分	収入額(円)	支出額(円)
前年度より繰越	2,495	
本会計より繰入	700,000	
特別賛助会費	790,000	
雑収入	2,031	
会報印刷費		1,318,400
会報発送費		87,620
編集費		50,851
取材費		17,779
事務費		10,159
次年度繰越金		9,717
合計	1,494,526	1,494,526

特別賛助会費

収入のうち特別賛助会費(1口1万円)79万円は65法人の協賛によるもので、内訳は次の通りです。

「3口」鐘紡(株)小田原工場、富士写真フィルム(株)小田原工場

2法人

「2口」足柄香粧(株)、小田原魚市場、小田原瓦斯(株)、JA小田原、小田原中央青果(株)、カネボウ化粧品鴨宮工場、さがみ信用金庫、みみづく幼稚園、ヤオマサ(株)、小田原製作所

以上10法人

「1口」計 65法人

雑収入は預金利子。支出のうち、会報印刷費は、第一六一号〜一六五号

お陰様をもちまして、充

(計二二八頁)の五回分です。会報発送費は、会員の外に地域の小・中・高校、公立図書館、各文化機関や行政機関への郵送料及び封筒代。編集費は、執筆者・編集者連絡費用、お礼、編集打ち合せ費用、コピー代等。取材費は、フィルム代、DPE代、写真複写代等。事務費は、文房具代です。

実した内容の編集が出来、非常に好評をいただきと共に高い評価を受けております。

「小田原史談」は、地域の文化の一つの顔であるという意気込みで、編集委員一同努力をしておりますので、今後ともよろしくご支援、ご鞭撻くださるようお願い申し上げます。